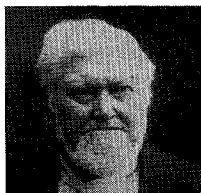




聖徒の道

12 1978



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ペンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

マリオン・D・ハンクス
ロバート・D・ヘイルズ
ディーン・L・ラーセン
リチャード・G・スコット

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

赤松 成次郎 (翻訳部長)

も く じ

| | |
|-----------------------|----|
| 大管長会のクリスマス メッセージ | 1 |
| 家庭訪問の理想 | 2 |
| みどり児イエスの誕生 | 7 |
| 思いやりある予言者 ジョセフ・スミス | 10 |
| 啓示に導かれている私たち | 14 |
| 主のみつかいからいただいた しんぶん | 21 |
| おもちゃばこ | 23 |
| こひつじ | 24 |
| ハヌカーまつり | 27 |
| シオンを求めて | 29 |
| シオンの陣営 | 37 |
| 新しい系図プログラム | 39 |
| ローカル・ニュース | 44 |

表紙の説明

「受胎告知」ジョン・スコット画。

聖徒の道 12月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
印刷所 株式会社 精興社
配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0529 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

大管長会のクリスマスメッセージ

◆ 世界中の人々がクリスマスを迎える準備をしています。この日は特別な日です。願わくばすべての人々が、平和の君、メシヤ、世の贖い主であるイエス・キリストのベツレヘムでの誕生を祝って下さるように。

アダム以来、予言者たちは贖い主の誕生について語ってきました。予言者イザヤとニーファイは、キリストの誕生の数世紀前に、イエスが^{おとめ}処女からお生まれになると宣言しました。ミカとアルマは、イエスの誕生の地を予言しています。また、ダニエルとレーマン人サムエルは、イエスのこの地上におけるみ業についてさらに詳しく述べています。ホセアはイエスがエジプトに逃れることについて語りました。

イエスの誕生に先立ち、古代の予言者たちは、イエスの栄光に満ちた贖罪と、復活の奇跡について語っています。彼らは、主の誕生により全人類の復活への道が文字通り開かれ、ふさわしい人に「神の賜のうち最大なるもの」である永遠の生命が与えられるようになることを告げています。

主は、この世における主のみ業の道を備える者として最も気高い予言者のひとりであるバプテスマのヨハネをお遣わしになりました。このように、主の誕生には数世紀にわたる備えがありました。古代の予言者たちと救い主ご自身の言葉に思いを寄せ、主の誕生を祝えますように。そのために、主は私たちになすべき事柄を幾つか教えて下さっています。

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」(マタイ22:39)

「施しをする時には、……自分の前でラッパを吹きならすな。」(マタイ6:2)

「受けるよりは与える方が、さいわいである。」(使徒20:35)

「勇気を出しなさい。」(ヨハネ16:33)

「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。」(ルカ6:27)

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

しかし私たちは、この季節に行なわなければならないもうひとつの備えについて考えてみる必要があります。それは、主の再臨に対する備えです。主は私たちに、完き栄光をもって再びこの世に来られることを繰り返して語っておられます。何という偉大な出来事でしょうか。私たちは主の再臨に対してどのような備えをすればよいのでしょうか。この備えについては、イエスご自身が使徒たちに語られた勧告に勝るものはありません。

「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。」(ヨハネ15:10)

そしてイエスは、戒めを守ることによってどのような祝福が得られるかを語っておられます。

「……あなたがたの喜びが満ちあふれる……。」(ヨハネ15:11)

願わくばこの季節が全人類にとって喜びに満ちた備えの時となりますように。



家庭訪問の理想

大管長

スベンサー・W・キンボール

愛する姉妹の皆さん、私が扶助協会の存在とその大切さに初めて気付いたのは、まだごく幼い頃のことでした。

私の家族は私が3歳の時にソルトレーク・シティーからアリゾナに引っ越しました。その時すでに母には6人の子供がいて、アリゾナでさらに5人の子供を産みました。しかしその間、母はずっとワード部扶助協会会長でした。

新しい土地では、共同井戸を使っていました。また、夜ともなれば網戸に虫がびっしり張りついて外が見えなくなるといった有様でした。そうした中で腸チフスやそのほかのいろいろな病気が流行しました。けれども、病院も看護婦も皆無で、心得のある者といえば仕事をもてあまし気味の医者がひとりというお粗末な医療環境でした。

最近私が読んだ母の日記に、次のように、書かれていました。「子供たちをルーズにあずけて、スミス姉妹のお宅に行ってきた。彼女は双子のひとりもなくしたばかりで、ほかの子供たちも腸チフスで重体である。」「きょうは一日中、姉妹たちと一緒に、ジョーンズ姉妹のふたりのお子さんの埋葬衣を縫った。」このようなことが沢山書かれています。扶助協会に対する私の最初の認識はこれでした。このような仕事は現在もある程度行なわれていると思います。というのは、扶助協会の仕事

には霊的なことや倫理だけでなく、ワード部の人々の物的福祉も含まれるからです。

私は訪問教師について考えるたびに、その責任が、「常に教会員を守護し（月に20分間ではなく常に）、彼らと共にありて彼らを強くすべきものとす（家庭を訪問するだけでなく、彼らと共にいて励まし、力づけ、強くする）。また……邪曲なきよう、……頑固なることなきよう、また虚言、蔭口、悪口などもなきよう注意すべきものとす」（教義と聖約20：53-54）」というホームティーチャーの責任に、多くの点で似ていると思います。

これは何と素晴らしい機会でしょう。ところが、このことを忘れて、天候のことや政治、ワード部の行事やワード部の分割、監督会の再組織、扶助協会会長会の再組織、あるいは議論や批判の種となるワード部の様々な事柄などに話の花を咲かせる人が多いのが現状です。しかし、ふたりの姉妹たちには、有害な話を控えて、代わりに教会とその教え、教会の方針、活動など、教会を強くする話題に姉妹たちの心に向けることのできる素晴らしい特権が与えられているのです。

私が見るところ、このプログラムには何の強制もありません。あるのはただ励ましと愛のみです。私たちの愛によって改宗し、愛によって励みを得る人々が多いことにただ、目を見張るばかりです。私たちは、教会員のみ

ならず、非教会員にも、「警告を与え、^と積み、
勧め且つ教えて、キリストに来る様すべての
人々を勧誘」(教義と聖約20:59)しなければ
なりません。

立派な働きができるように、訪問教師は気
高い目的を持ち、それをいつも心に留めて、
大きなビジョンと、決して冷めることのない
熱意と、積極的な態度、それに大きな愛を持
つ必要があります。

教義と聖約の中では、「この『みたま』は、
信仰の祈りによりて汝らに与えらる。而して
汝らもし『みたま』を受けざる時は教うべか
らず」(教義と聖約42:14)とっておられます。
皆さんの働きが神権者の働きに似ている
とすれば、皆さんは「聖書と完全なる福音を
載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音
の原則」(教義と聖約42:12)を教えなければ
なりません。単なる倫理を教えるのではない
のです。けれども皆さんには、その福音の原
則を調べ、理解し、靈感の導くままに相手の
姉妹にそれを伝えるに当たっては自由があり
ます。人それぞれに別々のアプローチと、別

々の結論と、別々の証の仕方があります。

当然のことながら、教師は自分の教える事
柄をみずから守らなければなりません。しかし、
私たちは時としてこのことを忘れがちです。
教える事柄はみずから守ることが必要です。

「またわれ汝らに一つの誠命^{いまし}を与う。すな
わち汝ら互いにこの王国の教義を教ゆべし」
(教義と聖約88:77)と、主は言われました。

ただ訪問し、友達になるだけで満足しては
なりません。もちろん友情は大切です。しか
し、友情を築くのに、生命と救いの永遠の原
則を教えることに勝る方法がはたしてあるで
しょうか。

あなたの証が強力な手段となります。だれ
もあなたの証に応酬したり、証を無にしたり
はできません。聖書の研究に一生を捧げる聖
書学者は大勢います。彼らは私たち以上に聖



句に通じ、弁も立つかもしれません。しかし、だれひとり私たちの証に応酬することはできないのです。彼らは反論できず、口をつぐむことでしょう。いつも型にはまった証をする必要はありません。証にはいろいろな仕方があります。

訪問教師は訪問先の姉妹たちを導けるようになることが大切です。活力とビジョンと真心において、また証において、卓越した女性となることが必要です。とりわけ、論破できない証を持つことが大切です。

教義と聖約38章に次のような感銘深い聖句があります。

「されど、誠にわれ汝らに告ぐ、汝らわが任命したる職に応じて互いに教え合うべきなり。

ことごとくの者（これは女性をもさすと思います）、兄弟（姉妹）を己が身の如くに思い、わが前に徳と聖きを履み行ふべし。……

汝らの中誰か十二人の息子を有つに、その一人にのみ偏よることをせざればその子たちよく父に仕う。然るに、すなわち一人に向いて汝礼服を着けて此所に座せよと言ひ、また他に向いて汝ぼろを着て彼所に居れと言ひ、しかも息子たちに向いて、見よ、われ公平なりと言ふことを得んや。

見よ、こは一つの比喩を以て汝らに語るどころなれど、正にわれ在るが如く真なり。われ汝らに向いて言わん、汝らひとつとなれ。もしひとつとならずば、汝らはわがものにあらず。」（教義と聖約38：23—24、26—27）

ぼろを着ている姉妹たち、すなわち霊のぼろを着ている姉妹たちは大勢います。たとえに言われているように、豪華な霊の礼服を与えられている人々もいます。私たちは責任について多くの話をします。しかし、実際に家庭を訪問してぼろを礼服と交換する特権は、皆さんにあるのです。

私たちは責任についてよく話しますが、「今朝は家庭訪問をしなくてはならないです」と言う時はすでに熱意と自覚と目標を失っています。そうではなく、「きょうは待ちに待った日だわ。姉妹たちの家に出掛けて行って励ましてあげられるのでうれしいわ」と言えるようであってほしいと思います。

皆さんには責任があります。皆さんは正しい権威によって神から召されているのです。主は次のように言われました。「われの汝らを清浄にせんため、わが前に汝らの心を潔め、また汝らの手と汝らの足を清めよ。

かくて、われは汝らがこの悪しき世の血によりて汚れざることを、汝らの父にして汝らの神なるわが神に証をなし……」（教義と聖約88：74—75）と。

たとえ訪問先の妹姉が素っ気無かったり、訪問をあまり喜ばなかったりしたとしても、その家を避けてはなりません。その妹を無視してはなりません。

ホームティーチャーや訪問教師の受け持つ家庭は、4軒、5軒、6軒、あるいは7軒と沢山ですが、軒数が多いからといって、彼らに霊のぼろを着せておいてもよいということではありません。また、家庭を訪問する時は、無益なおしゃべりや感情的な言葉があつてはなりません。皆さんが訪問する目的は人を救いに導くことなのです。また、皆さんの訪問を受けて、新たな視野と新たな理解を得て、教会に活発になった人々も大勢います。皆さんはカーテンを引き開け、彼女たちの視野を広げ、新しいものを与えました。彼女たちは一生の間そのことを口にしないかもしれません。しかし、皆さんはそのような働きを行なったのです。

ご承知のように、皆さんはこれらの姉妹たちを救うばかりでなく、その夫や家庭をも救っているのです。姉妹が少し不活発であつた

り、教会のことにあまり関心を示さなかったりすると、そのご主人がもっと不活発になったり、子供たちがプログラムにいい加減になったりすることが少なからずあります。もちろん例外はありますが、そのような人々は方々で少しずつそのことで嘆いていることでしょう。神の王国に溶け込めずにいるのです。ですから、皆さんには大切な仕事があります。「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」(Ⅱコリント9:6)と、パウロは言っています。私たちは言葉だけではまったく実りを得られません。心を言葉に込め、精神を整え、計画することです。訪問する日の朝に、断食をする姉妹がどれだけいるでしょうか。それが必要かどうかは分かりません。しかし教会には、要求されなくても自発的にしたいと思うことが沢山あるものです。ただ家を訪ね、ドアをノックし、一時を過ごし、帰ってきて報告するということだけでは、ちょうどパウロの言う「空を打つような拳闘」(Ⅰコリント9:26)をしている人に似ています。何の進歩も見られません。私たちは前向きな態度をもって、望まれている働きをする必要があるのです。

どの地方にも、訪問を拒む姉妹たちがいるのではないかと思います。不承不承家の中へ入れる姉妹たちもいることでしょう。しかし、皆さんの訪問をまだかまだかと待ちかねている姉妹たちもいます。

家にいるのにドアを開けない人や、ドアを開けても笑顔を見せない人、仕方無しに中に入れても本心は来訪をいやがっている人、このような姉妹たちに対しては、「祈と断食とによらなければ」(マタイ17:21)という主の勧めに従うとよいでしょう。

皆さん御存じのように、主は無形の方法、手段、力を用いて人々の心を動かされました。

アルマのことを覚えておいででしょうか。教会員を迫害していたアルマが、翌日には教会の偉大な擁護者となった話を。(モーサヤ27章参照)パウロを御存じでしょうか。聖徒を迫害し、投獄していたパウロが、数日のうちに会堂で福音を力強く説くようになった話を。(使徒9章参照)なぜそのように変わったのでしょうか。それは知恵ある主によってもたらされた無形の力があつたからです。主が彼らの心を動かされたのでした。主はほかにもいろいろなことをなさいました。私たちはもちろん、それが何であるかを知っています。

「でも、あの人が変わるはずがありません」と言う人があるかもしれません。しかしそのような人の心もかならず動かせます。そして、教会に来るよう導くことができるのです。ジョン・テイラー大管長は、適切な人が適切な時に正しい精神をもって正しい方法で適切な手だてを講じるならば、改宗しない人はいないと語っています。先のように言う人はこの適切さを全部は満たしていなかったのです。けれども、そうすることが、はたして不可能だと言えるのでしょうか。

モルモン経の最初の書にもどって、読んでみたいと思います。ニーファイは次のように言っています。

「私は主が命じたもうたことを行って行こう。私は、主が命じたもうたことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわぬことを承知しているからである。」(Ⅰニーファイ3:7)

私たちにはできるのです。私たちは「できない」という言葉を言わないようにしなければなりません。

主があなたを召されたら、あなたはそれを受けられるでしょうか。それとも、ワード部の会長があなたを召したと考えるでしょうか。ワ

ード部の会長から召されたのであればできないかもしれません。しかし、神が正しい糸路を通じてあなたを召されたのであれば、最善を尽くせばあなたはかならずできるのです。

落胆するのは簡単です。やめるのは簡単です。しかし、失敗してはならないのです。ニーファイが周囲の状況が整っていない時に出掛けて行って、しんちゅう版を手に入れられなかった次第については、皆さんご承知でしょう。兄たちも手に入れることはできませんでした。彼らはそれを買うことができませんでした。レーバンの手からそれを買取することはできなかったのです。また、あえて屋敷に押し入ることもできませんでした。命が危うかったからです。ところが、少年ニーファイは、何ひとつ武器も持たずに町へ入り、立ちだかった壁と閉ざされた門をくぐり、立ち入れないはずの庭へ踏み込み、鍵のかかった倉に入り、大勢の兵士の中を通り抜けて、子孫たちを不信仰の滅びから救う記録を両腕に抱えて帰ってきたのでした。(Iニーファイ 3—4 章参照)

ニーファイは不可能なことを行なったのです。なぜなら、主には不可能なことはないからです。私たちが主の側に立ち、主から召しを受け、戒めを与えられる時、私たちの活力と努力、計画、祈りが仕事に見合うだけ十分なされれば、その仕事は当然達成されることでしょう。

私たちは常に心の中に誠実さと謙遜さを持ち、主に対して全幅の信頼を寄せなければなりません。

愛が最大の律法であることを忘れないで下さい。主はふたつの大切な律法を問われた時にこう答えられました。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な、第一のいましめで

ある。

第二もこれと同様である、『自分を愛するよう
にあなたの隣人を愛せよ』。(マタイ 22: 37—39)

主は、隣人とはだれであるかを教えられました。隣人とは今身近にいない人であり、旅人であり、傷ついた人であり、生活に窮している人です。あらゆる人が私たちの隣人です。皆さんが訪問する姉妹たちは皆さんの隣人です。責任を果たすために訪問することと、隣人に完全な福音の知識を携えて行くこととは同じ訪問でも目的が異なります。先程述べたように、皆さんは何でもできるのです。

作家のロイド・C・ダグラス (1877—1951年) は次のように書いています。「自然はいつも、その盲目的な、しかし整然とした経過を脅かすものに反抗した。木は生長を妨げる壁に何年も緩やかな声なき戦いを挑んできたが、目に見える進展はなかった。ところがある日、壁は倒れた。木が突如として異常な力を発揮したためではない。自衛と脱出の辛抱強い労苦が実ったのである。長く幽閉された木が己れを解放し、自然が我が道を進んだのであった。」(ロイド・C・ダグラス、*The Robe*「聖衣」)

皆さんにはそれができます。壁を倒し、石を割る細い蔓、小さな根のように、人々に影響を及ぼし、悪しき錨を断ち割って活動の場に連れもどすことができるのです。それは可能なのです。

栄えある働きに携わり、愛ある人格をもって人々に影響を投げ掛ける姉妹の皆さんを、神が祝福されますように、イエス・キリストのみ名によりお祈りします。アーメン。

(ソルトレーク・モニュメントパークステーク
キ部訪問教師大会における話、1958年9月16日)

みどり児イエスの誕生

ジェフリー・R・ホランド



キリスト生誕の聖なる出来事からは学ぶべき事柄が非常に多い。そのために、私たちは何かひとつの事柄だけを強調することを一般にためらう。しかし、皆さんと一堂に会したこの場で、あえてそうすることを許していただきたいと思う。

近年私の心にかかって離れないひとつのことは、これが極貧の物語であるということである。ルカが、「客間には余地がなかった」と書かずに、「客間には彼らのいる余地がなかった」（ルカ2：7）と書いたことに、特別な意味はなかったかと考えるのである。確かではないが、当時においても現代と同様に、金があるのをいったのではないかと思う。ヨセフとマリヤに金や地位があったら、混雑した時期にも宿は見付かったことだろう。

靈感聖書の記述も、「宿屋で彼らのために部屋を与えてくれる者はまったくいなかった」（靈感記2：7）と、彼らが有力者の知己を持たなかったことを示唆しているように思う。

歴史家の推量をうのみにはできないが、このふたりが非常に貧しかったことは分かる。出産後に清めの捧げ物をした時、彼らは小羊の代わりに、主がモーセの律法の中で貧しい者の負担を軽くするためにその代替として認めておられる山ばとを捧げている。（レビ12：8 参照）

後に賢人たちが贈り物を持って訪れ、この出来事に光彩と富貴を添えたが、彼らは少なく見積もっても数百キロの遠方（おそらくはベルシャ）からやって来たと思われる。したがって、イエスの誕生の晩に到着したとすれば、星が現われるずっと以前に出発していなければならない。しかし、これは考えられないことである。事実、マタイは彼らが着いた時、イエスは「幼な子」で、家族は「家」に住んでいたと記録している。（マタイ2：11）

ここに、私たちがこの季節に心すべき大切なことが語られているように思う。当時イエスの生誕に対して贈り物が捧げられ、これが

現在のごちそうや飾り物やプレゼントの原点となっている。しかし、たとえわずかな時間でも、それに先立ってひとりでイエスの生誕の意義を考える静かな時間を過ごすようにすべきではないだろうか。

黄金と没薬と乳香が謹んで捧げられ、感謝して受け取られた。私たちの贈り物も、毎年いつもそうでありたいと思う。私の家族は知っているが、私は贈り物のやり取りにすぐめまいを起こしてしまう。

そのために、私も皆さんと同じように、この世の豪華な品々の無いあの簡素な、貧困とも見える一夜のことを思い出す必要がある。私たちの献身の対象、素朴で神聖な対象、ベツレヘムのみどり児のことを考えてこそ、贈り物をするのがなぜ似つかわしいか、その訳が分かるのである。

最近、私は父親として、ヨセフのことをよく考えるようになった。ヨセフは、言葉数は少ないがたくましく、生ける神の御子の育ての親として他のだれよりもふさわしかった。しかし、ほとんど名を知られなかった。イエスに働くことを教える者として、あらゆる者の中から選ばれたのがヨセフであった。律法の本をイエスに教えたのもヨセフであった。また、仕事場以外に、イエスに、自分がだれで、やがてどのような者になるはずであるかを理解させるように努めたのもヨセフであった。

私の長男が生まれたのは、私がブリガム・ヤング大学の大学院1年を終了したばかりの時であった。ヨセフとマリヤほどではないまでも、私たちは非常に貧しかった。妻と私はふたりともアルバイト学生で、その上家賃の足しにアパートの管理人の仕事を引き受けていた。新品を買うお金もなく廃品同然のバッテリーを積んだ小さなフォルクスワーゲンを使っていた。

それでも、特別の夜を迎えるに当たって、私はできる限りのことをしようとした。自分の将来を抵当にしてでも、妻にはさっぱりしたシーツと、無菌の器具と、親切な看護婦と、

熟練した医師を初めての子のために用意したいと思った。妻か子供に最高の私立病院での治療が必要であれば、命を張ってでも治療を受けさせたことだろう。

私はその気持ち（その後の子供たちに対しても同じ気持ちを抱いていた）を、友も血縁もなく、助けようとする人もいない見知らぬ町の通りを歩むヨセフの気持ちに比べてみる。マリヤは、出産直前の最も苦しい時期に、ガリラヤのナザレからユダヤのベツレヘムまでおよそ160キロを徒歩か馬上の旅をした。ヨセフはマリヤの無言の勇氣に涙したに違いない。ふたりは人知れず家畜のいるほら穴のうまやへ下り、そこで神の御子の誕生を迎えたのである。

家畜のふんやくずを片付けながら、ヨセフの胸中は何のようであったらう。急いできれいなわらを捜し、家畜を別な場所へ移しながら、ヨセフは悲しみを感じたのではないだろうか。「こんなに不潔で、病気の危険が大きくて、ひどい環境の下に生まれる子がいるだろうか。これが王の誕生にふさわしい場所だろうか。神の御子の母親が、このような汚れた見知らぬ所で死の陰の谷を歩んでよいのだろうか。少しでも妻の樂を望むのはよくないことだろうか。御子がこんな所で生まれてよいのだろうか」と、ヨセフは考えなかっただろうか。

だが、ヨセフは不平をもらさず、マリヤは嘆かなかった。ふたりはもっと多くのことを知っており、最善を尽くしたのであった。

その時、おそらくこのふたりは、生まれてくるみどり児が、生まれる時も死ぬ時も、人のあらゆる苦痛と失意のさらに下まで落ちる必要があることを知っていたのであろう。イエスはそのようにして、自分は惨めな環境の下に生まれたと思う人々に助けの手を差し伸べたもうのである。

私はマリヤのことも考える。歴史上で最も恵まれた女性、まだ少女の時に、自分の一生のみならず、人類の将来をも変えたあの言葉

を天使から受けた女性である。「主にいと恵まれた処女よ、おめでとう、主があなたと共におられます。あなたは選ばれ、祝福された女です。」(靈感訳ルカ1:28) マリヤの人格と備えの深さが、純真さと円熟とを示す返答によく表れている。「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。」(ルカ1:38)

私が深く胸を打たれるのはこれである。自分が生ける魂を宿したことを知り、胎内で生命が育つを感じ、やがて子供を出産する、その母親の気持ちを想像する時である。そのような時に父親は傍らに立って見守るだけであるが、母親は身をもって感じ、決して忘れることがない。ここでまた、ベツレヘムの聖夜についてのルカの繊細な言葉が思い出される。

「マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。」(ルカ2:6-7) この簡潔な言葉が私たちの耳に響く。みどり児に次いで、今度はマリヤが主役であり、王妃であり、母の母であり、きわめて劇的なその情景の中心人物である。またこの言葉は、愛する夫を度外視して、マリヤただひとりを語っている。

ここで初子を抱くまだ幼さを残したうら若い女性は、出産に当たって、母か叔母か姉か友達かに近くにいてほしいと思わなかったであろうか。このような貴い子供の出生は、ユダヤ中の産婆の世話や助けを受けるに値したはずである。マリヤの手を取り、顔を冷やし、産みの苦しみを終えた後に彼女をひんやりした清潔な寝床の上で休ませてあげられたらと、だれしもが思う。

しかし、現実はそうではなかった。ヨセフの不慣れな介添えだけで、マリヤは自分で初子を産み、あらかじめ用意してきた小さな布にくるんで、干し草を枕にして寝かせたのである。

その時、幕の両側で天の軍勢が歓声を上げた。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように。」(ルカ2:14)

しかし天上の証人たちを除けば、そこにいたのはただ3人、ヨセフとマリヤとイエスと名付けられたみどり児だけであった。

人類史上の焦点ともいべきこの時に当たって、新しい星に照らし出された光景はその目的を語っていた。おそらく、ほかにだれも目撃者はいなかったであろう。貧しい若い大工と、美しい処女の母、それに聖なる場景を告げるすべのないうまやの物言わぬ動物たち以外には。

やがて羊飼いが訪れ、後に東方から賢人たちが来る。しかし最初は、おもちゃもツリーも飾りもない、小さな家族だけであった。みどり児が生まれた。それが最初のクリスマスである。

「つちより出でし人を活かしめ、つきぬ生命を与うるために、いま生れまじし君をたたえよ」(讚美歌205番) このように私たちが歌うのは、このみどり児のことである。

おそらくイエスはその贈り物と誕生とご自身の幼年時代を思い出し、天国に住む者にはその純粹さと信仰と心からの謙遜が必要なることを思いながら、慕い来る幼な子たちのつぶらな目(イエスの真実の姿をいつも一番よく見ていた目)を見詰めては幾度もこう言われたに違いない。「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。」(マタイ18:3)

クリスマスは、いつの時代にあっても子供たちのものである。私の大好きなクリスマス・キャロルが子供の歌であるのは、そのためなのだと思う。私はとりわけ思いを込めてこの歌を歌う。

「ねどもなく エスさまは
かいばおけに ねんねした……
わたしのすきな エスさま
いつもそばにおりたまえ
エスさまはいつも わたしのそばにいて
まもりたまえ こどもたちみな
あなたのみくにに みちびきたまえ」
(子供の歌 F-2)

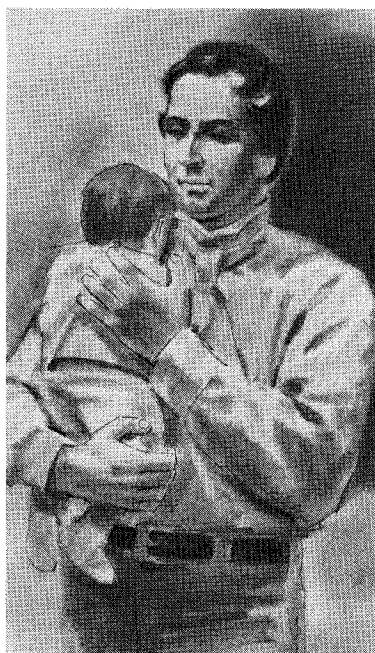
思いやりある 予言者ジョセフ・スミス

ケネス・W・ゴッドフリー

過 去16年あまり教会歴史を教え、教会の初期の歴史を深く研究してきた中で、私が予言者ジョセフ・スミスの素晴らしい特質のひとつであると知ったことに、彼の優しさがある。彼はこの大いなる特質を一生保ち続け、あらゆる人種の人々、またあらゆる動物にこれを示した。彼はミズーリ州リバティーの牢獄に数名の聖徒たちとともに捕えられていた時、妻のエマに何度か手紙を書いた。その

中で、子供たちの健康や霊的な状態を何度も尋ねている。また興味深いことに、ある手紙では、エマに息子たちや娘たちのことを知らせしてほしいと書いたくだり、愛鳥のジョアンナと、かわいがっていた犬のオールドメイジャーのことを尋ねている。

ジョセフとエマがマードック家の双子を養子にし、オハイオ州ハイラムの襲撃に生き残ったジュリアを我が子同然に育てたことはよ



く知られている。このジュリアは極度に苦しい結婚生活を経験した後、エマ・スミスのもとに帰り、娘時代と変わらない愛に包まれて過ごした。初期の教会員の日記には当時の教会員の思いやりある行為が幾つも記されているが、現在それについておそらくあまり知られていないと思う。

1841年、父のジョン・ウォーカー、母のリディア・アダムス・ホームズ・ウォーカー、それに10人の子供たちから成る一家がノーヴェーに引っ越してきた。信仰篤いこの一家は、1838年と1839年のあの恐怖時代に、ハウズミルの大虐殺とミズーリ人の迫害を逃れて生き延びた人々であった。彼らは極貧の状態であったが、しかし希望と期待をもって、モルモンの首都にたどりついた。そしてその夜、父の兄弟の家で、ジョセフ・スミスに紹介されたのであった。その後、夏にウォーカー家をマラリア熱が襲い、ウォーカー姉妹が手の尽くしようのない状態に陥った時、ジョセフはそれを聞きつけてエマとともに駆け付けた。そして、所が変われば健康状態も良くなるだろうと、この姉妹を自宅に引き取った。しかししばらくして、まだ病身のリディアは、長期間子供たちと離れているのに耐えられず、自宅に帰してくれるように頼んだ。すでに冬に入っていたため、ベッドをそこに積み、体を毛布で覆って、リディアは大事に家に運ばれた。子供たちの所に帰った彼女は子供たちを集め、真理から決して離れずに、「苦しみも苦痛の涙もない世界で」再会できるように立派な生活をしてほしいと語った。そして両目を閉じると、「彼女の美しい霊は、優しい顔にこうごうしい笑みを残して他界した。」

ウォーカー姉妹は死に、10人の子供たちが

残された。末の子供は2歳にもなっていなかった。また、この悲しみがウォーカー兄弟の健康をも損ない、彼も死を免れ得ないような状態となった。

ジョセフはこの一家の悩みを知り、また助けにやってきた。そしてウォーカー兄弟に、「療養しなければ」他界した妻の所へ彼も行くことになるだろうと話し、「あなたのお子さんたちは私も大好きです。私の家を開放しましょう。当分の間、家を売って、小さいお子さんたちは親しい友人に預け、上の4人は私に預けませんか。私の子供と一緒に育てますから。小さいお子さんたちがいやがったり、満足のゆく扱いを受けなかったりしたら、そのお子さんたちも預かって、あなたの帰りを待ちたいと思います」と言った。

ウォーカー兄弟は予言者の勧めに従った。そして、子供たちが予言者の馬車を借りてほかの家に預けられた弟や妹たちの所へよく出掛けて行ったことを、ルーシーが記録している。その頃、8歳のリディアが脳炎にかかった。予言者は彼女のことを心配し、約束通り自宅へ引き取って、回復を祈り、わが子同然に看病した。しかし、数日後、リディアは霊界の母のもとへ旅立った。エマとジョセフは子供たちに同行して、幼いリディアの遺体を安息の場に納めた。残る子供たちも次々と全員が予言者の家に引き取られ、予言者が死ぬ時まで世話になった。その後、健康を回復した父親がもどって来て、やがて家族そろって平原の旅についた。彼らはジョセフとエマが示してくれた親切と愛と真心を、生涯決して忘れなかったことだろう。

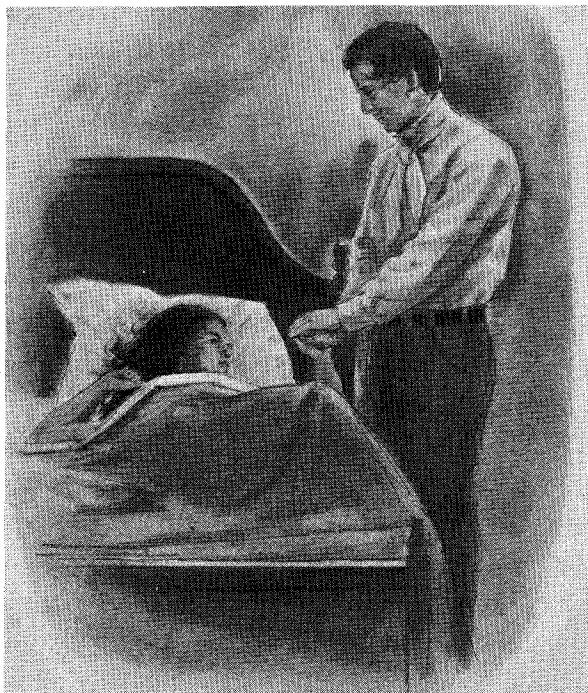
メアリー・アン・スターンズはパーレー・P・ブラット長老の義理の娘であるが、彼女

は予言者ジョセフ・スミスの深い思いやりを告げるエピソードを未発表の自叙伝の中で語っている。プラット長老の伝道が終わって家族が移住者たちとミズーリ州セントルイス経由で帰還する途中、ミシシッピー川に多量の氷塊が浮かんでいたことや寒さが厳しかったことで、彼らは1ヵ月間の足止めを食った。それからようやく彼らはノーヴーに到着した。その時に、予言者ジョセフ・スミスに会いたいというイギリス人たちの念願よりも、彼ら移住者たちの安全を気遣うノーヴーの聖徒たちの心配の方が大きく、ジョセフとハイラムと大勢の民衆が船着場に出迎えていた。プラット長老は一行をふたりの著名な指導者に紹介した。それから、プラット一家を除く全員が上陸してそれぞれの宿に向かった後、予言者がプラット家族のいる船室にやってきた。

「温かいあいさつを交わした後、プラット兄弟は椅子に掛けて、パーレー坊やとナサン

坊やをひざに乗せ、感慨深げな様子で、『出掛ける時は子供が3人でしたが、帰る時は5人になりました』と言った。するとジョセフ兄弟が、『ええ、パーレー兄弟、刈り穂を担いで帰ってきて下さいました』と言いながら涙を流した。プラット兄弟が、みんなの湿っぽくなった気持ちを見て取って、『私たちの帰還がお気に召さないとすれば、また逆もどりせねばなりませんなあ』と、喜びの涙を浮かべながら言った。』

プラット長老のこの言葉で、湿っぽさが吹き飛んで笑顔がもどり、喜びがみんなの胸に満ちた。それからジョセフは立ち上がり、「さあ、パーレー兄弟、皆さんで私の家においで下さい。すぐそこです。長旅のあとはくつろげますよ」と言うと、重病のプラット姉妹を大きな安楽椅子に座らせ、ホッジ兄弟とジョセフの護衛人たちの手で予言者の家へ運んだ。こうして、家族全員が心ゆくまで楽しい一夜を過ごした。



予言者の思いやりは神のすべての子供たちに及んでいる。どんな人をも尊重する彼の思いやりが、教会初期の黒人改宗者であったジェーン・E・マニング姉妹の1893年の記録に示されている。マニング姉妹は1842年にコネチカット州で教会に入り、非常な苦勞を積み、大きな危険を冒して、数名の黒人教会員とともにノーヴーへ来た。この勇氣ある人々は、靴底がすり減り、足が裂けて「地面に血の足跡」が残る程歩き続け、やっとの思いでイリノイ州ペオリアにたどりついた。その町で官憲から身分証明書がなければ投獄すると脅された。そこで彼らは自由民であるという証明書を提示した。こうして彼らはさらに旅を続け、途中水深が首までもある川を幾つも越えて、やっとなーヴーに到着したのである。到着後間もなく、彼らはジョセフ・スミスの自宅へ案内された。アント・ジェーンはこう書き残している。

「エマ姉妹がドアの所に立っていて、優しく『どうぞ、どうぞ、お入り下さい』とおっしゃった。ジョセフ兄弟はそこにいた数人の白人の姉妹たちに、『姉妹たち、今晚は今到着された兄弟姉妹と一緒にこの部屋を使って下さい』とおっしゃった。ジョセフ兄弟は部屋に椅子を並べてから出て行き、エマ姉妹とバーンハイゼル博士を連れて来て私たちに紹介して下さい。ジョセフ兄弟は椅子をひとつ持って来て私の隣に腰掛け、『あなたがこのグループの長ですね』とおっしゃった。私は、『はい、さようでございます』と返事した。すると、『神様の祝福がありますように。どんな旅でしたか、聞かせて下さい』とおっしゃったので、私はこれまで書いたことやそのほかの出来事を皆さんにもっと詳しくお話した。すると、ジョセフ兄弟はバーンハイゼル博士

のひざをポンとたたいて、『博士、いかがです。素晴らしい信仰ではありませんか』とおっしゃった。博士は、『そうですね、その通りです。私だったら、途中で家に逃げ帰ったことでしょうか』とおっしゃった。』

適当な住まいが決まるまで、彼らは全員その週の間ずっと予言者の家に逗留した。予言者は毎朝彼らの部屋の様子を見にやってきた。そして、途中で服をなくしたジェーンに新しい服を持って来たりした。ある朝、ジェーン・マニングがひとりだけまだ家が見付からずに泣いていると、それを聞いた予言者はそのことをエマに話して、自分たち家族と一緒に生活するようにとジェーンに勧めた。ジェーンはそれを喜び、アイロン掛けや洗濯や料理を受け持ち、ジョセフとエマの親切を生涯忘れなかった。ジェーンは予言者の家で過ごした頃のことをいつも感謝しながら、1908年4月に、教会に忠実なまま世を去った。

またある時、ミシガン州に住んでいてまだ教会員ではなかった未亡人のエミリー・ウィリアムズの赤ちゃんが重い病気にかかり、かなりの日数がたってから回復の見込みはないという医者^のの宣告を受けた。そこで、ジョセフ・スミスがいとこの家に来ていることを聞いていたエミリーは、人をやってジョセフに子供を助けてほしいと頼んだ。すると予言者は彼の父親とふたりでやってきて、子供の傍らにひざまずくと、頭に手を按いて、健康の回復を約束した。エミリーは、『子供は寝返りを打ち、発作がおさまって寝入り、翌朝にはすっかり治っていた』と書いている。

このように、予言者ジョセフ・スミスはすべての人に愛と思いやりの模範を示し、今日なお末日聖徒の自覚を問うているのである。

啓示に導かれている私たち

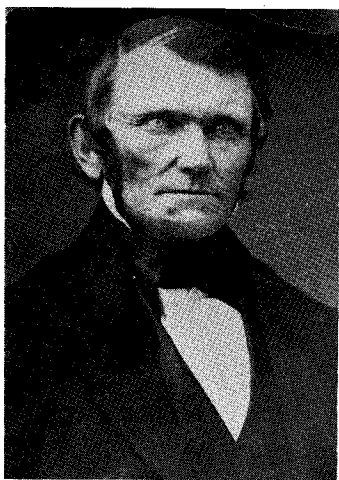
ウィルフォード・ウッドラフ

ユタ州ローガンで催されたカッシュステーク部大会におけるウィルフォード・ウッドラフ大管長の説教。1891年11月1日（日）午後6部

今朝この会場に向かう前に、私はモーゼズ・サッチャー兄弟の描いた「ピラトの前に立つキリスト」と「カルバリのキリスト」の絵を見てきた。そして、その絵を見ながら、ジョセフ・F・スミス兄弟がかつて語ったように、救い主は確かによろずの物の下にまで身を落とされたと感じた。主は、御父の定められた神権時代に、みどり児としてこの世に來られた。主が御父の指示に従い肉体を持ってみ業を行なわれた3年半というわずかな期間のことを少し考えていただきたい。主が被った苦難、成し遂げられたみ業……神の教会の組織、十二使徒と七十人の聖任、主に従った弟子たちのことを考えてみたい。主は世の人々を贖うために、死刑の宣告を受けて十字架に掛けられ、血を流された。しかし、そのような苦難を受けたのは主ひとりではなかった。主のすべての使徒が、神のみ言葉とイエス・キリストに対する証のゆえに死に追いやられたのである。ただ黙示者ヨハネだけは別であった。何人も彼を死に至らしめることはできなかった。彼は主から、肉体を持ってこの世にとどまるよう命を受けていたからである。さもなくば、他の使徒たちと同様に殺されていたであろう。十字架にくぎ付けされ

た救い主を見ながら、私はこのロッキー山中にいる私たちの状態を考えてみた。この地の民となってから、60年が過ぎた。今日こうして大管長会と会員の皆さんが一堂に会せるようになったのはなぜだろう。60年たった現在、使徒たちが表通りを歩けるようになったのはなぜだろう。6千万の人々の中にあって、20万以上の末日聖徒がこの盆地に集合したのはなぜだろうか。末日聖徒の心の中には、この質問に対する答えがある。兄弟姉妹の皆さん、これらの事柄には深い意味がある。私たちは、救い主と使徒たちがみ業を進められた時代とは、ある意味で異なった神権時代に住み、異なった秩序の下にいる。当時はまさに犠牲の時代であった。使徒であることを証したそれら聖なる人々は、救い主と共に自らの命を捧げる覚悟であった。それゆえ、彼らの教会の歴史は、今日の神の教会の歴史と比べると非常に短い。ひとりを除いて、彼らは皆殺され、神は彼らをご自身のみもとに引き取られた。また、地上から神権が取り去られ、1829年まで父なる神と御子イエス・キリストのみ手の内にそれはとどめおかれたのである。こうして十数世紀が過ぎた。その間大勢の人が生まれ、この地上で暮らし、そして死んで霊





ウィルフォード・ウッドラフ（46歳当時）

主は時の初めから私たちと共におられ、今もそれは変わっていない。この教会に啓示のなかった日は一日たりともない。また、これからは主は啓示を止められることはないであろう。だれが生まれ、だれが死に、だれがこの教会の指導者として召されようと問題ではない。ただその指導者は、全能の神の靈感によって教会を導く必要がある。

界に行った。私たちが知る限り、彼らの内、人々の中に出て行って、生命と救いの福音の儀式を執り行なう権能を有する者はひとりもいなかった。確かに立派な人は大勢いた。しかし彼らは自分に与えられた最高の光に従って行動したに過ぎない。ジョン・ウェスレー、マルチン・ルター、ウィクリフ、ツ빙グリ、メランヒトン等、多くの人々が、それぞれの時代に現われ、彼らが有する知識と理解力に従って福音を宣べ伝えた。しかし、彼らには死後も効力を及ぼす儀式を執行する権能がなかった。聖なる神権がなかったからである。

今日この時代、私たちは神権が回復されるという歴史のひとつを迎えた。主はジョセフ・スミスをお立てになった。そして時機が到来した時、ジョセフ・スミスは世に出て、神の教会を組織した。ジョセフ・スミスとはいかなる人物であろうか。彼は、学問のない世事に疎いひとりの若者に過ぎなかった。しかし、清らかな少年であった。彼は、アブラハム、イサク、ヤコブの後裔であり、古代

の族長や予言者たちから予言されていた人である。モルモン経には彼の名前が出てくる。ジョセフ・スミスは聖霊の勧めに従って行動し、祈りの答えとして御父と御子の訪れを受けた。その時に、御父はジョセフ・スミスに言われた。「こはわが愛子なり、彼に聞け。」（ジョセフ・スミス2：17）彼は、救い主が御父のみ言葉に忠実であったように、イエスキリストのみ言葉に死に至るまで忠実に従った。私は、あの時、なぜ予言者とその兄ハイラムが私たちのもとから取り上げられたのか不思議でならなかった。しかし、ジョセフ・スミスは神の命令によって、また天よりの力と啓示によって聖任され、この時満ちたる神権時代の基を築いたのである。彼は、この世の最後の時代に、人の子の再臨に備えて、このキリストの教会を組織するべく選ばれ、聖任された人である。

ジョセフ・スミスの殉教後、私はそのことについてよく考え、彼は死ぬように、すなわちこの神権時代の証としてみずからの血を流すよ

う定められていたのだという確信を得た。先に述べたように、ジョセフ・スミスは教育のない人であった。そのような彼を教え導いたのは、天使たち、すなわちイエスの時代にこの地上に住んでいた使徒たちであった。ジョセフ・スミスは、世の人々が受け入れなかった証と教えを受け入れたのである。また、あらゆるキリスト教派が結集しても決して行なえない方法でこの教会を組織する力を授かったのである。なぜだろうか。それは、富や教育に関係なく、人は自分が持っていないものは他の人に与えることができないからである。彼らには神権がなかったため、教会を組織する力がなかったのである。しかし、ジョセフ・スミスには神権があった。したがって、この教会を組織することができた。

迫害を受け、町を追われ、家を破壊されはしたが、その時代から今日に至るまで、この教会は発展を続けている。神のみもとから落とされた霊たちは、道を踏み誤った大勢の人々と手を組んで、この教会に反対してきた。しかし、この教会を滅ぼす力はなかった。なぜだろうか。全能の神が建てられた教会だからである。……

私は、シオンを築き上げて予言者たちの言葉成就する力の与えられているこの時代に生を受けたことを、神に感謝したい。現代の世の人々には警告が必要である。そしてその警告を発することが、今私たちがこの世にいる目的なのである。……

主はこの民を導くために、「世の弱き者たち」(教義と聖約1:19)をお選びになった。ジョセフ・スミスが世を去った時、彼はまだ40歳にもなっていなかった。教会が組織されて、わずか14年後のことである。そして、彼の後をブリガム・ヤング長老が継いだ。ブリガム・ヤングとは、どのような人であったか。

彼は塗装屋であり、ガラス職人でもあった。生活は裕福ではなかった。それでも主は、この民の指導者として彼を召されたのである。ブリガム・ヤング大管長については、皆さんよく御存じのことと思う。彼の功績と彼の気概とを。主が彼と共にあったので、彼は神の力によって、またイエス・キリストの啓示によって、この民を導くことができた。そして彼は、これらイスラエルの山々に、偉大なみ業の基を築いたのである。……

ジョン・テイラーはどうであっただろうか。彼はろくろ細工師で、一期間この教会を導いた。ウイルフォード・ウッドラフは粉屋であり、農夫であった。しかも彼はこの世に関する限り、それ以上のことを望んでいなかった。このようにして、主はこれらの人々を選んでこられた。神は常に「世の弱き者」をお選びになられたのである。主がご自身のみもとにいる霊たちをアブラハムに示された時、「これらすべてのものの中には、高貴にして偉大なるもの」(アブラハム3:22)が大勢いた。主はアブラハムに言われた。「これらの者をわが統治者となさん。……而して、神われに言いたまいけるは、アブラハムよ、汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり、と。」(アブラハム3:23)アブラハムは時の初めにイスラエルの頭として立てられた人であり、私たちの偉大な先祖である。そして神はこのアブラハムの血統を通して救い主を起こされた。

末日聖徒は、主は民を見捨てられた、あるいは主はみこころを明らかにされない、などと考えるべきではない。このように考えることは誤っている。主は時の初めから私たちと共におられ、今もそれは変わっていない。この教会に啓示のなかった日は一日たりともない。また、これからも主は啓示を止められること

はないであろう。だれが生まれ、だれが死に、だれがこの教会の指導者として召されようと問題ではない。ただその指導者は、全能の神の靈感によって教会を導く必要がある。靈感によらなければ、教会を導けないからである。この末の日に主がみ業をし損じられることはない。主は、シオンが栄光のうちに起こされ、小羊の妻となる花嫁に、偉大な花婿を迎える用意が整うまで、主の予言者と使徒たちに約束されたすべてのことを成就されるであろう。

私は先週の日曜日、これからお話す原則、すなわち啓示についてブリガム・シティーでもお話した。ブリガム・ヤング大管長の生涯を書いたものを読んでみても、『主はこう言われる』と語って明らかにした啓示はほとんど見当たらない。しかし、聖霊が彼の内に宿っていた。彼は靈感により、啓示によって教えを説いた。しかし、ジョセフが行なったようなかたちで啓示を伝えたことはただ一度だけで、それ以外はなかった。救い主のみ言葉とみ名によって、教会への啓示として、また戒めとして記され与えられたものはなかった。一方ジョセフは、このみ業の基をすえるに当たって、生涯ほとんど毎日のように、『主はこう言われる』と語っている。しかし彼に続く人々は、『主はこう言われる』と言う必要はないと考えていた。けれども、彼らは聖霊の力によって民を導いてきた。それがどういうことかを知りたければ、教義と聖約第68章の最初の6節をお読みいただきたい。この章には、主がオルソン・ハイドとルーク・ジョンソン、ライマン・ジョンソン、ウィリアム・E・マクレリンに、出て行って、聖霊に心を動かされるままに人々に福音を説くようにと告げられたみ言葉が記されている。

『およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり、主の意となり、主

の精神となり、主の言となり、主の声となり、世を救いに導く神の能力となるべし。』

私たちがイスラエルを導いてきたのは、この力による。ヤング大管長が教会を管理し、導いたのもこの力による。ジョン・テイラー大管長が教会を管理し、導いたのも、同じこの力による。そして、私もそのようにして、自分の能力の限りを尽くしてこの職を務めてきた。末日聖徒は、主は私たちと共にいない、私たちに啓示を与えておられないなどと、誤解しないでほしい。主は確かに私たちに啓示を与えて下さっているし、今後もこの世が終わるまで引続き啓示を与えて下さることだろう。

私は近頃数々の啓示を受けたが、それらは私にとって重要なものであった。そこで私は主が語られたことを皆さんにお話したい。公式の宣言と称する事柄について考えていただく。主は啓示の中で、シオンの多くの会員が公式の宣言のゆえに非常に心を痛めているということをごげられた。また衡平法裁判所長官の前で大管長会および十二使徒会が証言をしたことに対しても彼らは苦しんでいるという。あの啓示を受けて以来、私はこれらの事柄で大勢の人々が苦しんでいると何度も耳にした。それ以前には何も特別には聞いていなかったのだが。さて、主は私にあるひとつのことを行なうように命じられた。そこで先週の日曜日、私はブリガム・シティーでの大会でその命令を実行してきた。きょうこの場で、同じことを行ないたいと思う。主は私に、末日聖徒に対してひとつの質問をするように言われた。そしてまた、彼らが私の言うことに耳を傾け、神のみたまと權威によって答えるならば、彼らはすべて同じように答え、この件について同じ思いを抱くであろうと告げられたのである。質問はこうである。「末日聖

徒がとる道として、以下のふたつの内どちらが賢明であろうか。まず第1に、国の法律に逆ってこのまま多妻結婚の慣習を継続すること。これを行なえば6千万の人々を敵に回し、神殿は没収される。したがって、生者のため死者のためを問わず、神殿の儀式も行なわれなくなる。また大管長会と十二使徒会、それに教会員の家族の長は投獄され、財産は没収されてしまうであろう。(こうなれば、多妻結婚の慣習は事実上実行不可能になる。)第2は、私たちがこの多妻結婚の原則に従って行なってきた事柄をやめることである。これまで、多くの苦しみを受けてきた。しかし、これをやめれば、予言者および使徒、家族の長は捕えられずに家族と共に暮らし、人々に教えを授けて教会における責任を果たすこと

ができる。また神殿もそのままの状態を保ち、死者および生者のために、福音の儀式を執行することができるのである。」

主はこの慣習をやめないとどうなるかを、示現と啓示によって私に示された。もしもやめていなかったならば、メリル兄弟やアドルフソン兄弟、ロスケーリー兄弟、ライシュマン兄弟、その他の人々のためにこのローガンの神殿で儀式はまったく行なわれなくなっていたことだろう。なぜならシオンの地のどこにおいても儀式は停止されてしまうからである。イスラエルは混乱に陥り、多くの兄弟たちは投獄されていたであろう。そしてこのような状態は教会全体に及び、遂にはその慣習を放棄するよう追い込まれていたであろう。さて、このような状態でやめるか、それとも予言者も使徒も家長も皆自由で、また神殿も聖徒たちの手にあり、それがために死者の贖いも可能となるような方法をとるか。聖徒たちの手により、すでに多くの死者が霊界の獄から救われている。み業を進展させるか、それとも停止させるか。これが末日聖徒への質問である。皆さんはみずからの力で判断しなければならない。自分で答えを出して欲しい。しかし言っておきたい。私たちが継続する方を取った時に必ず先程述べたことが起きるということを。

私はかなり多数の人々が、それも指導者と呼ばれる人々が、受けている試練の厳しさのゆえに、まるで私ウッドラフ大管長が神のみたまを失い、背教しているのではないかと思っていることを知っている。しかし、みたまを失っているのでも、背教の道を歩んでいるのでもないことを理解していただきたい。主はウッドラフ大管長と共に、主の民と共にある。主は私に、どうすればよいかを如実に示された。またそうしない場合にその結末がどうな



ウイルフォード・ウッドラフ大管長と
3代に至る子孫 (1896年頃に撮影)

るかも教えたもうた。私は教会員以外の友人の訪問を受け、この件について何か措置を講じなければならないということ強く言われた。彼らは政府がどのような手を打ってくるか知っていたのである。これと同じ気持ちが多量なりとも教会員の間にも見られた。私は何も措置を講じない時に何が起こるかを、はっきりと見たのである。このような思いを、私は長い間抱いていた。しかし、私はこう申し上げたい。もしも天の神が私の今話したことを私に命じたまわなかったならば、すべて神殿は没収され、私も他の人々もみな投獄されていたに違いないということ。こうする内に、何をしよう主が命じておられるかすべてのことが私に分かった。そこで私は主のみもとへ行き、主が書けとお命じになることを書いた。そしてそれをジョージ・Q・キャノン、ジョセフ・F・スミスという信仰堅固な兄弟を初め、十二使徒の方々に提示したのである。私は民をその正しいと信ずる道からそれらから離れ、旗をひるがえして敵と戦った方がましだと思っている。幹部の兄弟たちは私に同意してくれた。そして1万名にも及ぶ末日聖徒たちも。なぜだろうか。それは、神のみたまイエス・キリストの啓示により、そうしよう心が動かされたからである。

私は皆さんに以上のことを申し上げたい。これについて思い計り、深く考えていただきたい。主は私たちとともにいて下さる。主は皆さんの理解の及ばない大いなるみ業をこの地で行なっておられる。これについて祈っていただきたい。心配しないように、また不快な気持ちを抱かないようにしていただきたい。

私は、神が私たちに福音を明らかにされたことを感謝している。神の教会が地上にあるこの時代に生を受けていることを感謝してい

る。私たちには予言者と使徒たちが与えられている。彼らは肉体をもってこの地上でみ業を推し進め、大勢の人々を救ってきた。そして彼らは死に、霊界に行った。ジョセフ・スミスはこの神権時代の鍵を有している。彼の後にだれが教会を導こうとも、彼はその鍵を永遠に保持することだろう。主は私たちに、この地に来て神殿を建てる力をお与え下さった。このロッキーの山々には3つの神殿が建てられ、そこで大勢の死者が贖われてきた。彼らは第一の復活にあずかることだろう。それゆえ、私たちは主に感謝すべきである。私たちはこれらの神殿を引き続き守りたいと思う。末日聖徒以外の者の手に渡さないようにしたい。兄弟姉妹に引き続き神殿に参入し、死者を贖い、生者に恵みをもたらしていただきたいと思う。主は皆さんと家族を見守って下さることだろう。また、主はシオンとこの時代のことを心に掛け、主のみ言葉をすべて成就されるであろう。

皆さんの上に神の祝福があるように。皆さんが主の勸告に聞き従うなら、主は必ずや皆さんを祝福されることだろう。

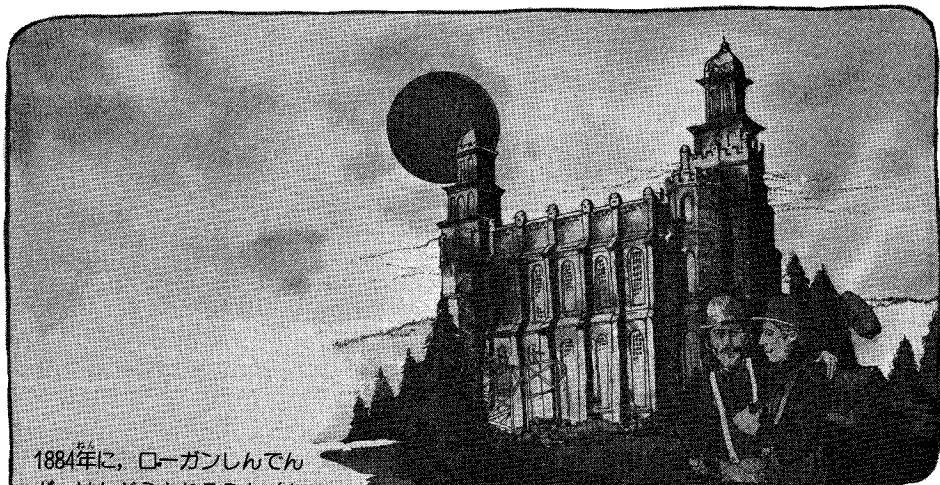
末日聖徒は神の計らいに不平不満を言うことを止めていただきたい。神を信頼し、みずからの義務を果たし、祈りを忘れないようにしていただきたい。主を信じ、シオンを築いていただきたい。そうすれば、すべてがうまくいくだろう。主は間もなく主の民を訪ねて来られる。また、義人のために主のみ業の期間を短くして下さる。さもなければ、ひとりも救われないからである。時のしるしに気をつけ、来るべき出来事のためにみずからを備えるよう皆さんに申し上げたい。皆さんの上に神の祝福があるように。アーメン。

ちい
小さな
とも
お友だちへ



ほんとうにあつた話

主のみつかいからいただいたしんぶん



1884年に、ローガンしんてんが、けんどうされること(かみさまにささげられること)になりました。

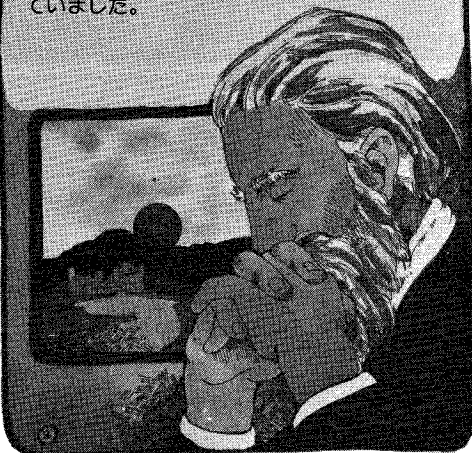
①

ヘンリー・バラードかんとくは、しんてんをたてるしことをする一方で、はるか遠くイギリスに住んでいたせんその名前を知ることができるように、いっしょうけんめいにいのつていました。

しんてんをけんどうする前の日、バラードかんとくの子供たちが、外であそんでいると、



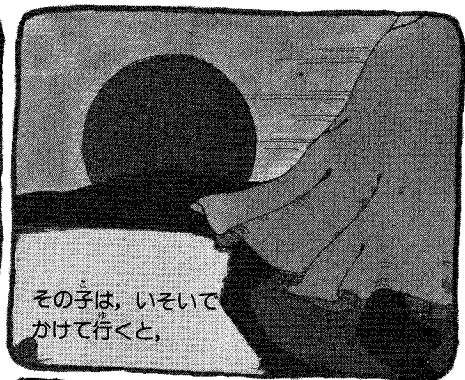
ふたりの見知らぬ人が、近づいてきて、



そのうちのひとりが、おりたんだしんぶん
をわたして、言いました。「これをお父さんに
おわたし。」



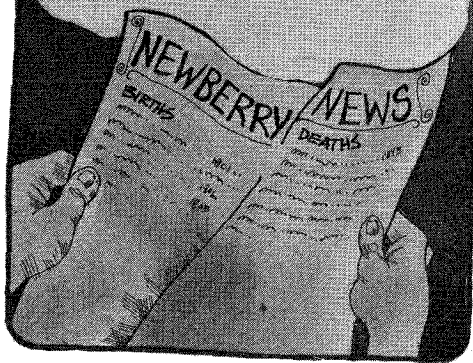
その子は、いそいで
かけて行くと、



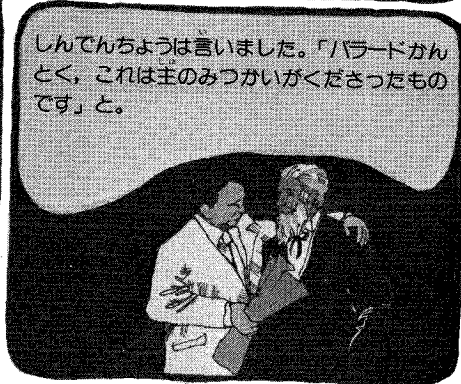
それをお父さんにわたしました。



そのしんぶんは、3日前のイギリスのしんぶん
でした。それには、バードかんとくのせ
んその名前や生まれた日、死んだ日書かれ
ていました。



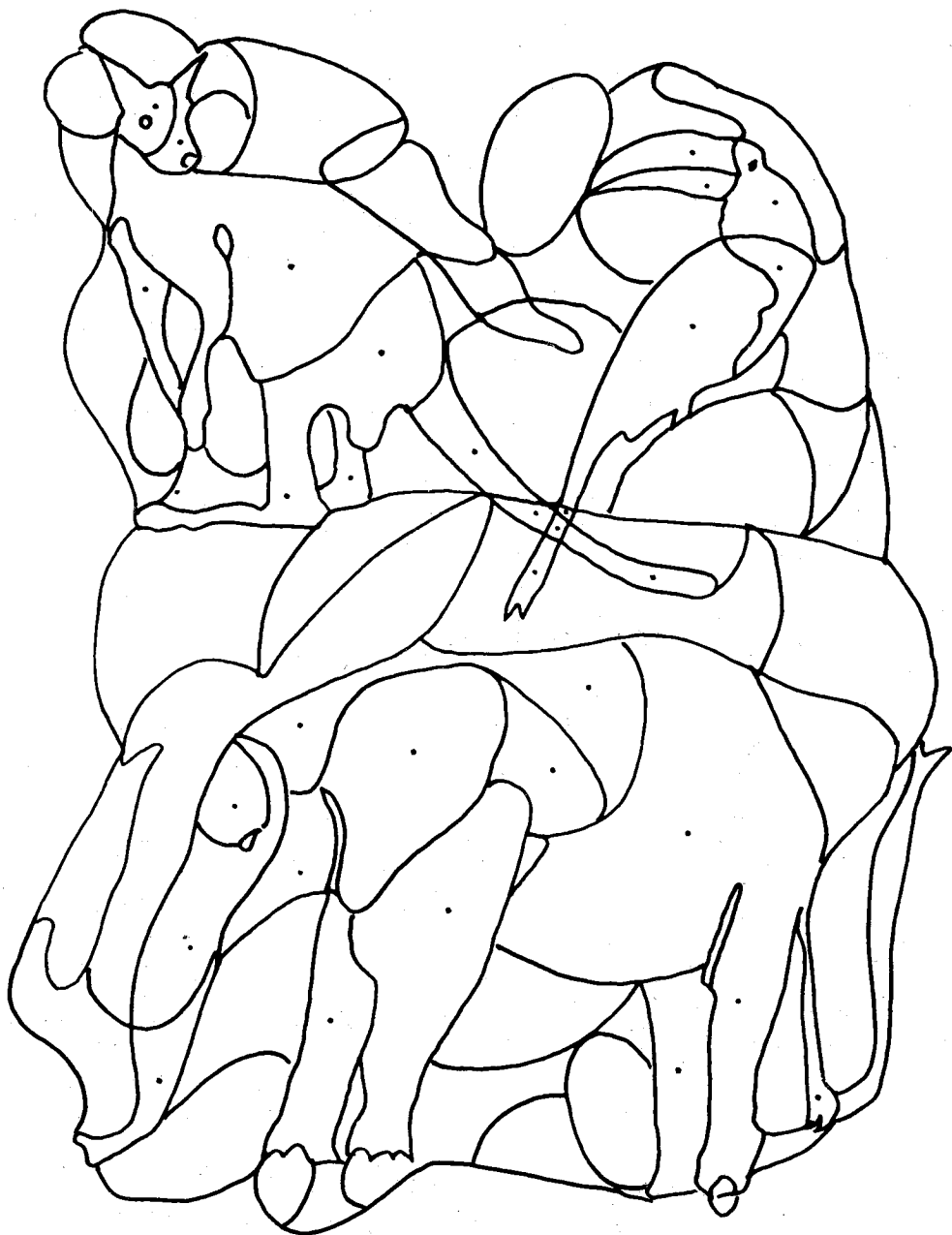
しんでんちょうは言いました。「バードか
んとく、これは主のみつかがくださったもの
です」と。





おもちゃばこ

てんのところをぬりつぶしてみましょう



よる
夜 がしずかにふけました。ガリラヤ
のおかには、ひつじかいのヨエル
少年が、こひつじをだいてすわって
います。ヨエル少年は、夜空にかがやく
星をながめるのが、大好きです。こひ
つじも大好きです。こひつじとい
ると、ちっともさびしくありませんで
した。

さむい夜も、あたたかいこひつじの
おかげで、ヨエル少年は、ぐっすりと
ねむることができるのです。けれど
も、今夜は、なかなかねむれません。

「お父さん、今夜の空は、いつもよ
り明るいね。」ヨエル少年は、お父さん
に言いました。

「かみさまのえいこうだよ。」お父さ
んは答えました。

「空が明るいときは、いつもそうで
しょう。でも、今夜の星は、まるでふ
つてきそう。手をのばすと、とどきそ
うだね。」ヨエル少年は言いました。

そう言われて空を見あげたお父さん
も、とてもおどろきました。「ほんとう
に明るい。」

こひつじ





ヨエル少年^{しょうねん}は、こひつじをしっかりと
だきよせると、マントにくるまり、も
っとかみさまのえいこうを見ようと、
地面^{じめん}にねころびました。

ヨエル少年^{しょうねん}は、東^{ひがし}の空^{そら}でかがやいて
いる大^{だい}すきな星^{ほし}をながめながら、この
星^{ほし}についてのたくさん^{おほ}の話^{はなし}を思い出し
ました。ひとり^{ひと}の天使^{てんし}が、大^{おほ}きなつる
ぎで、悪^{わる}い者^{もの}を追^おいはらうという話^{はなし}。
りっぱな王子^{おうじ}さまが、こま^{ひと}まっている人^{ひと}
びとを助^{たす}けたり、じぶんにつかえてく
れる人^{ひと}びとをほめたりする話^{はなし}。ヨエル
少年^{しょうねん}は、そのようなやさしい王子^{おうじ}さま
につかえ、じぶんのいのちをその王子^{おうじ}
さまにあげてもいいとさ^{おほ}えました。
そのうち^{しゅうねん}に、ヨエル少年^{しょうねん}は、ねむって
しまいました。

とつぜん、あたりがそうぞうしくな
りました。ヨエル少年^{しょうねん}は、そのにぎや
かな声^{こゑ}に目^めをさましました。

「さあ、出^でかけよう。いそいで。」ひ
つじかいのひとり^{ひと}が言^いいました。

「しるしだ。かみさまからのほんど
うのしるしだ。」ほかのひつじかい^いが言^い
いました。

ヨエル少年^{しょうねん}は、空^{そら}を見あげました。
ま夜中^{よなか}の空^{そら}に、明^{あか}るい光^{ひかり}がありました。
天^{てん}のまどが開^{ひら}かれて、かみさまのえい
こうがかがやきわたっているようでした。

すっかり目^めのさめてしまったヨエル

少年は、立ちあがって言いました。

「お父さん、あれなに？ どこから来たの？」ヨエル少年は、こひつじをだきあげました。

お父さんはヨエル少年のかたに手をおくと、おちついた声で言いました。

「おいで、ヨエル。とうとうするしがあらわれたよ。」

ふたりは、ほかの人びとのあとから、その光について行きました。

みんなは、その光にみちびかれて、家ちくのいるうまやにつきました。あたりがくらい中で、うまやはふしぎにかがやいているようでした。

ヨエル少年はおどろきました。うまやのざい木でももえだしたのだろうかとおもいました。もしもそうなら、麦わらはすぐにもえだすはずです。それは、昼の太陽のように天からさしてくる光でした。ひつじかいたちは、その場にひざまずきました。ひつじかいたちはけんそんな人たちで、そこがきよらかな場所であることを知っていたからです。

ひとりの男の人が、うまやの入口に立っていました。その人は、ひつじかいたちが来るのを待っていたかのよう、みんなをすぐに中に入れてくれました。中には、生まれたばかりの赤ちゃんが、かいばおけにねかせられていました。

「この赤ちゃんが、人びとをすくう方になれるのだろうか。そんなはずはない。うまやで生まれた王さまなんてきいたことがない。」ヨエル少年は、考えました。でも、ここは、けんそんなひつじかいたちがみちびかれた場所です。そして、また、じるしの光はかがやいていました。たしかに、それは、かみさまからの光でした。ヨエル少年は、ここにあたたかいものをかんじました。

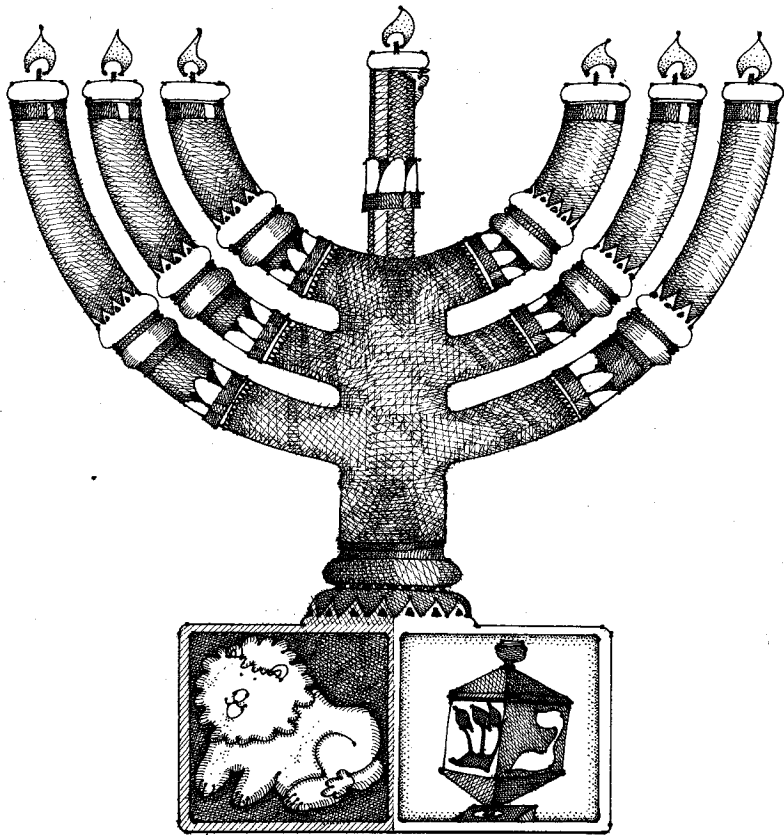
お父さんは、ヨエル少年の気持ちかわかっていたようで、こっくりとうなずきました。ヨエル少年は、こひつじをしっかりとだきよせました。

それから、かいばおけに近づくと、赤ちゃんの前に、こひつじをそっとおろしました。すると、赤ちゃんのお母さんは、やさしくほほえみしました。

ヨエル少年のころは、よろこびでいっぱいになりました。いちばん大せつにしているものを、この赤ちゃんにさしあげたのでした。

お父さんとヨエル少年は、うまやを出ました。ふりむくと、うまやは、かみさまのえいこうでまだかがやいていました。そのとき、ふたりのころのうちに、しずかに音がくがきこえてきたのでした。

ハヌカーまつり



クリスチャンが、クリスマスをお祝いするころ、世界中のユダヤ人は、「ハヌカーまつり」をお祝いします。この「ハヌカーまつり」は、「とうか火のまつり」とも、「みやきよめのまつり」ともよばれています。

このまつりで、子どもたちは、おく

りものをもらったり、げきをしたりします。また、ユダヤ人は、まずしい人におくりものをしたり、助けのひつような人びとのために、お金を集めたりします。

8日間のハヌカーまつりの間、ユダヤ人の家庭では、毎ばん、お父さんと

お母さんと子どもたちは、8本のろうそくを立てるようになっていてきれいなろうそく立て「メノラー」のまわりに集まります。そして、はじめの夜は、8本のろうそくのうちの1本に火をつけます。次の日の夜は、2ばん目のろうそくに火をつけます。こうして、8日間、1本ずつろうそくに火をつけるのです。これらのろうそくに火をとますのに使う、9本目のろうそくは、「シャマッシュ」とよばれています。

ろうそくがもえている間、人びとは楽しく歌ったり、ゲームをしたり、物語をしたり、ハヌカーまつりのためのおくべつな食べ物を食べたりします。

ハヌカーまつりは、むかしユダヤ人が、しんでんをかみさまにささげたことをいおうものです。きげん前168年に、ギリシャ・シリアの王がパレスチナをおそい、エルサレムをせんりょうしてしまいました。そして、この王は、ユダヤ人のしんでんをうばって、ぐうぞうをおきました。それから、ユダヤ人に、エホバのかみさまをしんじるのをやめて、ぐうぞうをおがむようにめいじました。けれども、ユダヤ人はエホバのかみさまをしんじることを、やめませんでした。そうするうちに、パレスチナにすむマッタティアが、ユダヤ人をさそって、反らんをおこしました。

ユダヤ人はマッタティアにしたがい、ユダヤの山にたてこもりました。そこで、ユダヤ人をしどうしたのが、マッタティアの5人の子どものひとり、ユダ・マッカビーです。

このようにして、ユダヤ人は、3年間たたかいました。ユダ・マッカビーは、ギリシャ・シリアの大ぐんを、なんども打ちまかしました。そしてとうとう、エルサレムをとりかえたのです。

ユダヤ人は、しんでんからすべてのぐうぞうをかたづけ、そこをもういちど、かみさまをれいはいする場所にしました。

それからユダは、しんでんをかみさまにささげ、さいだんの前にえいえんの火をとますために、おいわいをするようにめいじました。けれども、ランプにはひとばんの分しか油がありませんでした。ところがふしぎなことに、ランプは8日間ももえ続けたのです。そして、人びとは、ランプがもえ続ける間、おいわいをしました。

ユダヤ人は、ハヌカーまつりをいわうときに、ふこうにあってもいつも、しんこうと、ゆうきを持ち続けようとけっしんするのです。ユダヤ人がどうしてむかしのことをいつも思い出して、ろうそくに火をつけるときによろこぶのか、これでわかったことでしょう。



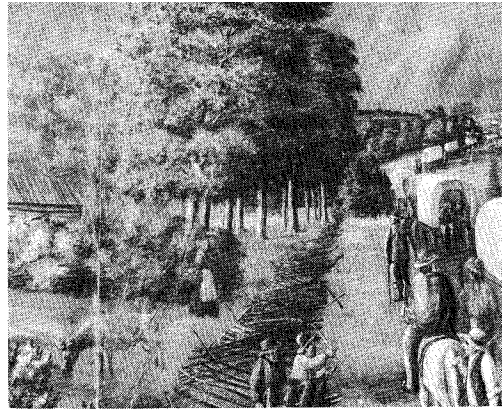
シオンを求めて

1830年～1835年

グレン・M・レオナード

重 大な出来事が数々あった1830年代は、末日聖徒の歴史でも最も重要な時代のひとつである。教会はニューヨーク州西部のフェイヤットでひそかに生まれ、急速に発展した。そして、み業を支える意気に燃えた改宗者た

ちは、回復された福音のことを進んで友人や隣人に説いた。ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリを教会の最初の長老として支持した人々は、自分の持ち物を、貧者に分け与え、オハイオ州カートランドの神殿の建築のため



ミズーリ州における開拓移民

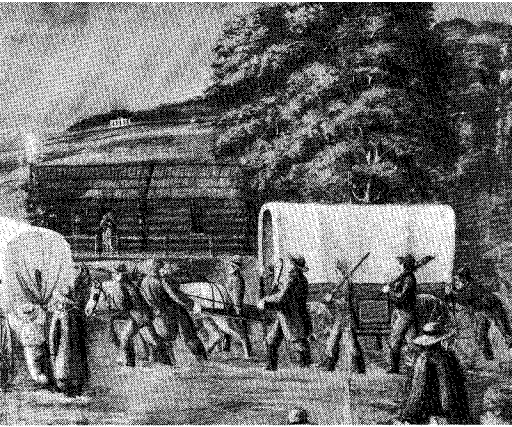
に捧げた。人手によらずに山から切り出された石は、やがて全世界に及ぶため、最初はゆっくりと転がりながら、時とともに次第にその速度と規模を増していった。

初期の末日聖徒は、モルモン経を読むことによって、イエス・キリストの再臨に先立つ重要な出来事にみずから参与しているという自覚を強めた。聖書とモルモン経と、ジョセフ・スミスを通じて新たに与えられた啓示は、万国の悪人の間から義人が集められる末の日に重要な伝道活動のあることを指摘していた。そして聖徒たちは、福千年の準備のひとつとして、この福音がイスラエルの家の残りの民に伝えられることを知ったのである。

1830年10月、オリヴァ・カウドリ、ピーター・ホイットマー・ジュニア、パーレー・P・プラット、ザイバ・ピーターソンは、ニューヨークから西部アメリカのインディアンへの伝道に出発した。一行は途中、ニューヨーク州バッファロー近くのカタログス族、次いでオハイオ州のワイアンドット族を訪れた。開拓移民たちがミズーリの西まで押し寄せていた時期であった。当時インディアンは、西進する開拓者に追われて、ミズーリ州以西で生活していた。しかしオリヴァ・カウドリとその一行はミズーリの辺境地帯に到着して失

望した。宣教師たちはショーニー族を訪れ、次にデラウェア州の知事と会った。インディアンは宣教師を歓迎したが、政府の管理官は治安を乱すという理由で宣教師に居留地からの撤退を命じた。レーマン人との初期のこの接触からは、宣教師が期待したような改宗は得られなかった。しかし、この旅行のお陰で教会の関心がミズーリ州に向き、やがて聖徒たちはここにシオンの市を建設したいと思うようになったのである。

宣教師たちはオハイオ州で大きな収穫を得た。彼らは西部に向かう途中、パーレー・P・プラットの友人でキャンベル派の教会で牧師をしていたシドニー・リグドンの家に立ち寄った。リグドンは最初懐疑的であったが、モルモン経の研究を始め、宣教師たちに自分の信徒への説教を頼み、間もなくバプテスマを望むようになった。こうしてその地方で130名程の人が教会を信じた。リグドンは予言者に会いたいという思いを募らせ、12月に若い帽子作りのエドワード・パートリッジと共に、ニューヨーク州ワーテルローのスミス家まで、ジョセフ・スミスに会いに出掛けた。予言者はリグドンの能力に感銘を覚え、やがて、リグドンは「更に大いなる業」(教義と聖約35：3)のために主が備えられた人である



ミスは家族と共にオハイオへ移り、以来1838年までカートランドが教会の本部となった。

啓示と翻訳

教会史におけるカートランド時代は、教会員が著しい宗教体験を味わった時期である。カートランドの聖徒たちはみたまの賜を目の当たりにし、新しい教会を導く啓示を数々受け、教会の運営体制が固められるのを目撃した。

という啓示を受けた。牧師の経験があるリグドンには、すぐに雄弁に福音を説き始めた。彼は間もなく、聖書の靈感訳を口述するジョセフ・スミスの筆記者となり、また大管長会の副管長となった。

当時ニューヨーク州の教会員にとって早急に必要なのは集合の場所であった。そして、啓示によりふたつの場所が示された。そのひとつは、ミズーリ州西部のジャクソン郡インデペンデンスの近くであった。1831年の夏、予言者たち数人がその地方を訪れ、ニューヨーク州コールズビルから移住する聖徒たちのために入植地を選んだ。彼らはそこをインデペンデンスも含めてシオンと呼んだ。それは、啓示によりそこが将来新エルサレムの都になると言われたからであった。ジョセフ・スミスはシオンに神殿のすみ石をすえ、エドワード・パートリッジをこの世の諸事をつかさどる監督に聖任した。エドワード・パートリッジは、教会での最初の監督である。

その間にオハイオ州北部では、ニューヨーク州から移住してきた改宗者たちがカートランドの地方に2番目のモルモンの集合の地を建設していた。彼らはオハイオ州出身の新しい改宗者とともに、シオンへの移住の時に備えて、共同体の建設に力を注いだ。ジョセフ・ス

ミスは家族と共にオハイオへ移り、以来1838年までカートランドが教会の本部となった。

オハイオ州での初期の改宗者のひとりには、ルーク・S・ジョンソンがいる。オハイオ州ハイラムの近くに大きな農場を所有していた父親のジョン・ジョンソン一家は、カートランドに予言者を訪ねた。ジョンソン夫人は慢性リューマチで6年間片腕が利かなかった。しかし、その来訪中に、予言者はジョンソン夫人の手を取り、「主イエス・キリストのみ名により、あなたに健康体となるよう命じる」と宣言した。そして、ジョンソン夫人は癒された。この出来事は目撃した人々に神権の力の証として忘れ得ぬ印象を残した。この奇跡に引き続き、末日聖徒の間に数多くのみたまの賜の現われがあった。ある時、シェーカー教徒であった人々がシェーカー派で行なわれていた、いわゆる「霊の作用」をもって真の賜をまねようと試みたが、異常な動作を予言者から叱責された。

それでもなお、教会のための啓示を受けたと主張する模倣者たちがいた。中でもハブルと名乗る婦人が、オハイオ州の聖徒を導く権利は自分にあると言い張った。予言者はそのような人々に対して、主はその役割にはただひとりを任命しておられると、以前と同様の啓示によって答えた。このように、ジョセフ・スミスを通じて下された近代の啓示は、聖徒

個人の生活を導き、教会の方針を教え、教義を説いた。

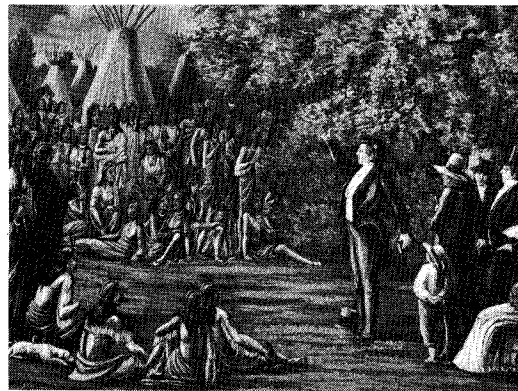
1830年代に、予言者は失われた聖典を回復して、教義の理解の領域を広げた。その内のふたつが、エノクの予言と、モーセの示現とその書で、これは後に高価なる真珠に収録されることになった。1830年の夏には、旧新約聖書の改訳が始まった。ジョセフ・スミスはこの仕事に約2年間携わり、誤訳されていた箇所を訂正した。また、彼はこの時期に数々の重要な啓示を受けた。この中には光栄の位に関する示現(教義と聖約76章)、戦争の予言(教義と聖約87章)、知恵の言葉(教義と聖約89章)、神権の教え(教義と聖約84章)、神と人との関係についての重要な真理(教義と聖約93章)などがある。

聖徒たちは初めから予言者の啓示や翻訳を自分の目で読みたいと望んだ。そこで予言者は、1830年の早々から、啓示の編集に着手している。彼は「^{いましめ}誠命の書」と名付けられることになった書物に収める啓示に編集上の訂正を加え、さらに1831年11月には啓示による「前書」と「追加」を付け加えた。しかし新しい聖典の印刷が3分の2完了していた1833年7月、インデペンデンスの教会の印刷所が暴徒により破壊された。印刷物の一部は教会員の手に残っていたが、それからさらに2年をかけて、書物に修正が施された。予言者はその書物の内容を多くして、「信仰篇」と呼ばれる教義的な講話を付け加え、啓示を大体年代順に並べ変えた。こうして、新しい聖典が「教義と聖約」として1835年の秋に出版された。

予言者に従う人々が啓示の宣言を待ち焦がれる一方で、大勢の隣人が近代の啓示のあることを嘲笑した。オハイオ州の各新聞はモルモンの信仰を愚弄し、聖職者たちもこれに加わり、時には先頭に立って公然と非難を浴び

せた。

反感は暴力に発展する場合がある。オハイオ州におけるその顕著な事件は、1832年3月24日夜、ジョセフ・スミスと家族がオハイオ州ハイラムのジョン・ジョンソン家に滞在していた時に起こった。その夜、30人近い暴徒の団が予言者ジョセフ・スミスとシドニー・リグドン^{リグドン}をベッドから引きずり下ろし、口をふさいで体の自由を奪い、ふたりを近くの草原に連れ出した。暴徒は狂ったように予言者を爪で引っかき、むりやりに口に酸を流し込もうとし、揚句の果てに裸の体にタールと羽毛を塗りたくった。また、リグドン長老は頭を地面に打って一時的な精神錯乱状態に陥った。さらに予言者はその1週間後にミズーリへ2度目の旅に出立した時にも、敵対者たちに付けねらわれた。けれども、蒸気船に逃がれて旅を無事に終えることができた。それ以後、襲撃と暗殺の危険から予言者を守るために、常時護衛が必要になった。



インディアンに福音を説くジョセフ・スミス

しかし、回復の良き知らせを告げる努力は、このような困難にも決してくじけなかった。ミズーリ州とオハイオ州にあった2カ所の教会印刷所から、予言者の妻のエマが編集した讚美歌集や、聖典の新刊や、教会の最初の新聞『イブニング・アンド・モーニング・スター』紙が発行された。このようにして、1830年代初期に伝道活動が著しく発展した。農閑期に長老たちが近くの町へ出掛けて行く短期伝道もよく行なわれた。また、手広い伝道によって、合衆国の新しい諸州とカナダ北部に福音が伝わった。

王国の組織

近代のイスラエルが集合し、福千年に備えて主の王国を建設するというのが、1830年代における説教と啓示の中心テーマであった。そして、イエス・キリストの回復された教会であるこの王国は、啓示によって告げられた原則と方式ののっとなって組織された。1835年の教義と聖約には、奉獻と管理の職の律法、ならびに神権の役職に関する啓示を初め、教会の運営についてごく初期に与えられた主の指示が載っていた。

主が考えておられる経済の理想形態が、1831年と1832年の啓示の中に示されている。それは奉獻と管理の職の律法と呼ばれた。この新しい経済秩序に同意した教会員は、自分の資産と所有物を教会に捧げた。代わって監督が、「自己と家族とを養うに足るだけ」の財物を、譲り、すなわち管理すべき物として各教会員に返した。(教義と聖約42:30—32参照)その余剰は必需品に事欠く人や貧乏な人に与えられ、教会の出版費用や教会の専任役員的生活費に当てられた。また奉獻の誓約を交わした教会員は、毎年剰余物を監督に納めるよう

期待された。

奉獻と管理の職の律法は、オハイオ州とミズーリ州の両方で実施された。しかし、聖徒たちの中には、この律法やそれに続く一連の変更に変更を唱える人々がいた。その結果、1838年に、什分の一の律法という低い制度が導入された。(教義と聖約119章)

奉獻と讓渡物を管理する責任は監督にあった。この時期は、パトリッジ監督がミズーリ州、ニューエル・K・ホイットニー監督がオハイオ州の世俗的業務を取り扱った。この監督たちに地区の管轄権が託され、彼らは発展する教会を治めるために1830年代に任命された新しい神権役員の中に数えられる。

1831年以前の教会の宗務組織は、「第一」の長老と「第二」の長老が管理する会長会の下に、長老、祭司、教師、執事によって構成されていた。しかし、その後の4年間に、ジョセフ・スミスは幾つかの新しい神権の職と定員会を紹介した。特に重要なのは、1831年6月3日、カートランドの特別大会で初めて大祭司が聖任され、以後管理権を有するこの職に任命される人々が次々と出たことである。

管理組織は、カートランド時代以降、形態が急速に整ってきた。1832年1月25日、ジョセフ・スミスが大神権の大管長に支持され、6週間以内にシドニー・リグドンとジェシー・ガウスのふたりが副管長に任命されて、大管長会が構成された。しかしガウスは1年も経たないうちに教会を離れ、フレデリック・G・ウィリアムズが代わって副管長に任命された。この大管長会は全教会を管理するとともに、1834年2月17日に組織された高等評議員会の助けを得て、カートランドステーク部のステーク部長会としても働いた。また同年7月にミズーリ州クレイ郡にもステーク部長会と高等評議員会が組織された。これが教会のユニ

ットとしてのステーキ部の始まりである。

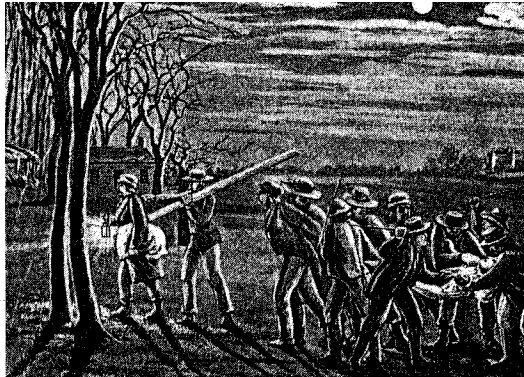
啓示によって知らされたもうひとつの新しい役職は祝福師である。ジョセフ・スミス・シニアが1833年12月18日にこの職に任命された。また1835年2月に、中央の定員会がふたつ追加された。十二使徒定員会と七十人定員会がそれである。

モルモン経の3人の見証者が初代の使徒を選ぶ任を受け、24歳から35歳の献身的な若者たちを選び出した。その全員が生涯忠実であった訳ではないが、この選ばれた青年たちの中には、後年ジョセフ・スミスを継いで大管長となったブリガム・ヤングがいた。新しい使徒たちは、聖任後間もなく、ジョセフ・スミスによって年齢順に前任後任の順位を付けられた。その名を前任順に挙げると以下の通りである。トーマス・B・マーシュ、デビッド・W・パッテン、ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、オルソン・ハイド、ウイリヤム・E・ムレリン、パーレー・P・プラット、ルーク・S・ジョンソン、ウイリヤム・B・スミス、オルソン・プラット、ジョン・F・ポイントン、ライマン・E・ジョンソン。

また、ジョセフ・スミスは1835年2月に最初の七十人を召し、7名の会長を置いて各定員会を管理させた。こうして七十人第一定員会の会長たちが、十二使徒を補佐して福音を世界に宣べ伝えるすべての七十人を導くことになった。教義と聖約の第84章と107章に記されている1832年と1835年の啓示では、新しい神権役員の責任が明らかにされている。

ジャクソン郡からの追放

カートランドでこれらの組織的發展があった一方で、ミズーリ州の聖徒たちはシオンの



地に対する夢を打ち砕かれていた。1833年にジョセフ・スミスがシオンの市と神殿の構想を明らかにしたが、それによると町は2.59平方キロで4ヘクタールのブロックに分かれ、24の神殿が2ブロックにそれぞれ12ずつ建てられる計画であった。しかしこの福千年の首都の構想は、末日聖徒とミズーリの先住者との対立により延期されることとなった。

先住の非教会員である開拓民たちは、モルモンの移住者たちの相次ぐ入植に脅威を感じた。聖徒たちは早々にジャクソン郡の土地を買い始めており、間もなくミズーリ人よりも人口が多くなる日も近いことだろう。そして、モルモンが事業や選挙を牛耳るに違いない、と。その上、地域の住民はシオンの集合、奉獻の律法、新しい啓示といったモルモンの信条に懐疑的であった。また、末日聖徒の改宗者の多くは合衆国北東部の出身であったが、当時のミズーリ人は奴隷制度を含めて南部の社会体制に味方していた。

ミズーリの住民はとりわけ黒人自由民の問題に神経をとがらせており、州法は自由黒人のミズーリ州への入植を禁止した。この州法の発布は、モルモンに対する敵意が爆発した1833年7月の論争のさなかであった。これに先立つ数ヵ月間、ミズーリの有力開拓民が好



暴徒に連れ出されたジョセフ・スミスとシドニー・リグドン

ましくない隣人を立ち退かせるためにいろいろ画策していた。彼らは反モルモンの記事を流し、非モルモンの異教徒たちは、自分たちの土地から強制撤去させようと言い張る一部の過激な聖徒たちの主張を糾弾していた。7月に、教会の新聞である『ザ・イブニング・アンド・モーニング・スター』紙が、ミズーリの自由黒人移住禁止法を論評する記事を掲載したところ、地域住民はそれを移住の奨励すなわち自分たちの奴隷制に対する威嚇と受け取った。教会新聞の編集長であったウイリアム・W・フェルプスはすぐさま釈明の一文を載せたが、激怒した住民はすでに「秘密憲法」と呼ばれた公式声明を出し、聖徒の追放に乗り出していた。

ミズーリ人はその月の下旬に、最後通告の支持を採りつける目的で公開の集会を開いた。彼らは末日聖徒の入植者に、土地と事業を売却して州から撤去することを求めた。地域の教会指導者がこの案を拒否すると、性急なミズーリ人たちが印刷所を壊し、モルモンの事業家たちを襲撃した。エドワード・パートリッジとチャールズ・アレンは公共広場でタールを塗られ、羽毛を付けられた。それから3日後、教会役員たちは暴徒に銃を突付けられ、翌春までにモルモンの全地所を明け渡す

という誓約書に署名させられたのである。

ジャクソン郡の教会指導者は、ミズーリ州のダニエル・ダンクリン知事に保護を願い出た。しかし州の役人から地域の法廷に援助を求めた方がよいと言われ、そのようにした。同時に聖徒たちは、自分たちの家や財産は自分たちで守るという意志を表明し、武装を始めた。ミズーリ人はこの行動を譲渡約束に対する違約と見なした。そして10月31日、聖徒たちに対して最初の報復措置が取られたのである。50人程の男たちが、インデペンデンスの13キロ西にあるビッグブルー川沿いの入植地を襲い、家々を壊し、数名の男たちを打ち打った。インデペンデンスのモルモンが度重なる脅迫に屈して家を捨てたのは、それから1週間もたたない内である。11月4日のビッグブルー川での小競り合いでは、銃撃戦により双方とも数人の死者を出した。

ミズーリ州副知事のルルバーン・W・ボッグズは、インデペンデンスの住民であったことから、対立グループ間の仲介役を務めた。彼は聖徒たちに武装解除と10日以内の平和的移転を勧めた。そして、地域の教会指導者たちはこの提案を受け入れた。しかし、暴徒の実行使はやまなかった。聖徒たちは急いで荷物をまとめ、安全を求めて四方に散った。多くの聖徒たちがミズーリ川を渡って直接北のクレイ郡に入ったところ、郡都リバティーの住民は仕事や住居や食料を提供してくれた。そこで、避難民は空家になっている奴隷小屋に住んだり、粗末な仮小屋を建てたり、テントを張ったりしてそこに住んだ。春が来ると、彼らは土地を借り、職を見付けた。

ジャクソン郡からの時ならぬ退去を、予言者は深く憂慮した。聖徒たちが苦難を被った上に、集合の中心地の建設計画が頓挫したのであった。彼は難民たちに土地の返還と損害

賠償を訴えて法律闘争を続けるように助言した。そこで聖徒たちは、ミズーリ州知事に帰宅する際の軍隊の護衛を頼んだ。知事はこれをして承したが、その軍隊は聖徒たちを憎悪するジャクソン郡の民兵であると言ひ渡された。法廷の証人たちの当惑を見てとった教会指導者はもはやこれまでと腹を決め、合衆国大統領アンドリュー・ジャクソンに請願した。しかしワシントン政府は、州の政策を強力に支持しており、連邦政府が地方政治に口出しすることを好まなかった。そして合衆国政府は、この問題をミズーリ州に差し戻した。

これらの請願中に、ジョセフ・スミスはシオンの地の受けもどす補助手段として末日聖徒の志願兵を募った。1834年2月にはカートランドの近辺と合衆国東部から先発隊が集まり、その後も聖徒たちが加わってミズーリ州まで1,600キロ行軍することになった。シオンの陣営として知られる205名の志願兵は、ミズーリの州兵と協力して、モルモンの避難民を安全に護送するというダンクリン知事の約束の遂行に当たる覚悟でいた。しかし、知事は約束を撤回した。末日聖徒に肩入れをすれば、それを不満とするミズーリ人が内乱を起こすだろうと心配したからであった。その代わりに知事は聖徒たちに、争点の土地を売って他の土地へ移るように勧めた。

双方の代表は1834年6月16日、リバティーの裁判所で顔を合わせた。教会の代表者は先住者たちに土地の買い上げを申し出たが拒否され、聖徒たちも自分の土地の売却に応じず、交渉は物別れに終わった。それから数日後、ミズーリ州ジャクソン郡のすぐ外側を流れるフィッシング川のほとりで、シオンの陣営が最後の野営をしていた時に、ジョセフ・スミスは土地の奪還を延期するようという啓示を受けた。それから1週間後、彼は陣営を解

散した。そして兵の多くは少人数ずつばらばらにオハイオ州カートランドへもどって行った。しかし一部の人々はミズーリ州にとどまった。

ミズーリの聖徒はミズーリ州クレイ郡に2年間滞在了。その後先住者たちが聖徒たちの永住に反対し始めた時、州政府の世話を得て移住先が決まり、聖徒たちは今度はそこより北方の入植のまばらな地域に落ち着いた。政府の役人は政治家の同意を得て、ミズーリ州に2つの新しい郡を作った。聖徒たちはその新しいコールドウェル郡のショール・クリーク沿いに、ファーウェストの町を建設した。そこは聖徒たちの新たな西部の集合地となり、2年間に5,000人に及ぶ教会員が住みついた。ファーウェストには各種の店とかじ屋、宿屋、印刷屋、学校があった。コールドウェル郡と2番目に作られたデービス郡の各地に聖徒たちは小さな集落を作った。そのひとつが1838年春に建設されたアダム・オンダイ・アーマンである。ファーウェストとアダム・オンダイ・アーマンでは、神殿用地が選ばれた。しかし、両方とも暴徒の妨害と聖徒が結局ミズーリ州から追放されたことにより、神殿は建築されなかった。

ミズーリ州における再入植と、その地における教会の進展の遅れから、カートランドに末日聖徒の安定した中心地を維持し、神殿を建てることの重要性が倍加したのであった。しかし、1830年代半ばにカートランドの聖徒たちは、背教問題と経済問題に悩まされるようになった。その結果、聖徒たちはカートランドの市を北部ミズーリの入植地もろとも見捨てて、イリノイ州ノーヴーに避難地を求めることとなるのである。

(続く)

シオンの陣営

ロナルド・W・ウォーカー



シオンの陣営に志願した 200 余名の兄弟たちは、往復 3,200 キロという道のりを、数々の困難を克服しながら歩き通した。ブリガム・ヤング兄弟の脳裏には、オハイオ州とミズーリ州の間を、一日 50 ないし 65 キロの速さで 3 ヶ月歩き通した苦しい経験が焼き付いていた。ぬかるみにはまった荷馬車を大変な思いで引っ張り出さなければならないこともあった。20 人から 30 人がかりで一台の荷馬車を丘の上まで引き上げることもしばしばであった。力の強い者は、体力のない者や歩けなくなった者を助けなければならなかった。ブ

リガム・ヤング兄弟は当時を回想して次のように述べている。「寝るのはたいてい夜中の 11 時か 12 時過ぎて、朝は早く起床した。」起床ラッパが吹かれるのは、午前 3 時から 4 時の間であった。(Journal of Discourses「説教集」4:101—102)

これは彼らにとって、忍耐を学ぶと同時に、試練の時であった。予言者ジョセフ・スミスは、次のように語って、食用にする以外いかなる動物をも殺さないよう彼らに勧告を与えている。「人が悪意をなくし、動物界を破滅に導く手を止めるならば、ライオンと小羊は一

緒に暮らすようになるだろう。」(History of the Church)「教会歴史」2:71—72)

ブリガム・ヤング兄弟は予言者ジョセフのこの言葉に耳を傾け、これに従った。ヤング兄弟が、背丈の高いうっそうと繁った草の上に寝袋を広げようとした時のことである。がらがらへびがとぐろを巻いて、彼に襲いかかろうと身構えた。そこでヤング兄弟は近くに居合わせた友人を呼んでこう言った。「このへびをどこかへ連れて行って、二度とここへもどって来ないように言ってくれませんか。それから、仲間にも今夜はこの陣営の中に入り込まないよう伝えてほしいと言って下さい。間違っただれかに殺されでもしたら大変ですから。」するとその友人は、言われた通りにへびを取り上げ、キャンプからかなり離れた所まで無事にそのへびを運んで行ったということである。

ヤング兄弟は次第にその天賦の才を發揮し始めた。陣営の隊長のひとりに選ばれた彼は、よく他の兄弟たちに福音を説いた。彼はまたときどき、食糧調達と責任を与えられた。彼は常に予言者ジョセフ・スミスの指示に忠実に従い、数多くの経験を積んだ。しかし中には、予言者の指示に不平を漏らす者もいた。行軍の苦しさから、意志の弱い隊員は愚痴をこぼさずにはいられなかったのである。ブリガム・ヤング兄弟は次のように回想している。「私たちは、不安におびえて不平を漏らす、始末に終えない隊員に悩まされた。私たちにとって、大隊を組んで長旅をするのは初めてのことだったからである。……ジョセフ兄弟はこの大隊を導き、勧告と指針を与える一方で、そのような無法で悪意ある隊員に敢然と立ち向かった。」(「説教集」10:20)

しかし、シオンの陣営はミズーリ州の聖徒を救い出すという目的を遂げることはできなかった。そのために、陣営内の不和は募る一方であった。当初の計画では、州兵が末日聖徒をジャクソン郡に復帰させた後、自分の家に帰った彼らの安全を図るためにカートランドからシオンの陣営を送り込むという手はずになっていた。ところが、予定の時になっても、ミズーリ州知事は、州兵を召集できなかったのである。その上、主の指示もあって、ジョセフ・スミスは陣営を解散せざるを得なかった。こうして、ミズーリ州での戦闘はなく、陣営の兄弟たちはオハイオ州にもどったのである。

カートランドに帰ったブリガム・ヤングは、多くの人々から、西部に向かったシオンの陣営についていろいろと質問を浴びせられた。彼らの質問を思い出しながら、彼はこう語っている。「あの行軍で恵みを受けたのはだれだろうか。行軍が主のみこころであるならば、どのような目的をもって主は私たちに行軍を命じられたのであろうか」と。ブリガム・ヤングは、自分が貴重な経験を積んできたことをはっきりと自覚していた。「私は兄弟たちに、自分は十分報いを受けたと語った。事実、予言者との旅で得た知識は、私の器にあふれるばかりに満ちた。」(「説教集」10:20)

数ヵ月後の1835年2月14日に、予言者ジョセフ・スミスは主から、十二使徒定員会を組織するようという啓示を受けた。そして、ブリガム・ヤング兄弟は、十二使徒のひとりに選ばれた。シオンの陣営の行軍中に見せた彼の勤勉な働きぶりが、予言者ジョセフ・スミスと主に認められたのである。

新しい系図プログラム



系図部ジョージ・H・ファッジ実務部長との会見

1977年8月にスペンサー・W・キンボール
大管長は言われた。「私は、生者への伝道と同様に、死者のための神殿活動も急ぐ必要があると感じている。私は先日も教会幹部の兄弟たちに話したが、死者のためのこの業のことがいつも私の心を離れない。……私たちは皆さんが個人としても家族としても、老いも若きもこの業を進めるように無条件に勧めらる。」(Ensign「エンサイン」1977年10月号、p. 82)

本誌：6月の地区集会で、来年から系図プログラムの規模が大幅に拡大されると発表されました。この変更についてお話しただけませんか。

ファッジ兄弟：現在の4代家族の記録プログラムによって、会員は「家族の記録」になじみ、系図の情報のまとめ方にも慣れてきました。また、このプログラムによって記録が教会の記録保管所に送られ、系図と神殿活動が非常に進みました。

今日新しい技術が開発され、主の目的もこれまでになく正確かつ迅速に達成されるようになっていきます。主のみ業を推し進めるに当たって、この技術を活用しなければ、

私たちはとがめられることでしょう。

これまで教会員は、4代あるいは可能であればそれ以上さかのぼって家族の記録を提出する責任を与えられていました。この探求を行なうには、手紙を書いたり、世界各地を旅行したりして、時間と費用が沢山掛かりました。しかもその割に入手できる情報は多くありませんでした。また、同時にほかにも親戚の人が同じ情報を求めて時間と費用を掛けているということがありました。次に、それぞれが探求を終えて系図部へ記録を提出しても、記録が食い違うことがよくありました。不正確な記録を受け入れることはできません。また、膨大な作業をこなさなければならない現在、これ以上重複して仕事をすることはできません。

本誌：どのような点が変更されるのですか。
ファッジ兄弟：会員は自分の兄弟、姉妹、両親と会って、「家族の記録」の記載事項を比較し、正確かどうかを調べ、家族の中のひとりが最終的に正確な4代の「系図表」とそれに伴う「家族の記録」を系図部に提出します。この段階で家族は父方と母方の親戚(おじ、おば、祖父母)と会って、彼ら

と先代の記録が正確であるかどうかを調べます。

その後の調査で新しい情報が手に入り、提出した記録に変更を加えなければならぬ時、それぞれの家族は教会の系図部に、追加あるいは訂正を通知します。

1978年12月で現在実施されている個人のための4代家族の記録プログラムは終わり、新たに家族のための4代プログラムが始まります。そして、1979年7月から、新たに作成された「家族の記録」と「系図表」の受理を開始します。

4代以上さかのぼって探求し、作成した記録も受理します。しかし今後は個人にこの探求が要求されることはなくなります。代わりに教会が膨大な記録を収集し、それから情報を抄出して、死者の神殿儀式を行なうようになります。

本誌：この収集と抄出のプログラムはどのように行ないますか。

ファッジ兄弟：私たちは現在35か国で95台のカメラを使って、年間4千万から5千万ページの記録を撮影しています。次にこうして収集した記録を分類し、目録を作成しています。

その記録から情報を「抄出」し、処理手続きを踏んで死者の名前を神殿に送り、儀式を施すことになります。そのために私たちはステーキ部で記録抄出プログラムを始めました。

現時点では、ひとりの撮影技師の仕事量をこなすのに約900人の抄出係が必要であると見積っています。今95台のカメラが使用されていますが、数年内にこの数はもっと増えることでしょう。そこでこれまでにすでに撮影されたものや、現在撮影しているものを処理するのに多くの抄出係が必要となります。

本誌：この話を聞くと、系図の仕事が個人に関係のないものになっていくように思う人がいるかもしれません。これまで自分の祖

先を捜すことは自分の責任であると考えてるように奨励されていたと思うのですが、この点についてはいかがですか。

ファッジ兄弟：その通りです。しかし主のみ業の進展する速度が増すにつれて、主は幹部の兄弟たちに「私たちは皆共通の先祖をいただいている」という重要な真理を示されました。私たちは皆共通の先祖、アダムとイヴの子孫です。しかし、私たちの系図はアダムに達するずっと前に重なり合ってきます。数代さかのぼると、皆さんの先祖は他の多くの人の直系の先祖でもあるのです。

このことを理解すれば、私たち教会員は皆、互いに協力して先祖を捜そうという気持ちになることでしょう。その結果として、血縁上も霊的にも親戚である人々を救う働きが有効に行なえるのです。

主は私たちがこの仕事を「末日の聖徒として」また「教会員として、……民として」（教義と聖約128：24参照）一致協力し達成することを望んでおられます。

ある意味で、私たちが死者の業のために用いている方法は、生きている人々に対する伝道で用いる方法に似ています。私は英国で伝道するように召されれば、人を偏り見ることなく、出会うすべての人々に教えを説くことでしょう。私と同じ姓の人にだけ、あるいは私と近い親戚関係にある人にだけ福音を説くというようなことはしないでしよう。

また、福音を受け入れるかもしれない人人を無視して、ひとりの人を捜し出すために宣教師を大都市に派遣するようなことはしません。しかし、近代の技術がなかった過去の時代に私たちが系図の探求で取った方法はこれでした。現在主は私たちに新しい手段を与えられました。そこで教会幹部は、死者のための伝道に力を入れる時が訪れたと判断しています。系図と伝道は事実上同じ仕事です。したがって、同じ原則、

同じ手法が取られるのです。

本誌：記録抄出プログラムを実施しているステーキ部に住む会員は、どのようにこれに参加できますか。

ファッジ兄弟：35ヵ国で記録を収集していますから、言語は様々です。ハンブルグのステーキ部ではドイツ語の記録を抄出し、メキシコのステーキ部ではスペイン語で記録を抄出することになります。

資格のある人がいれば、ステーキ部長はその人をステーキ部系図宣教師に召し、任命します。ステーキ部に何人のステーキ部系図宣教師が必要か、また各人が1週間に何時間その仕事を行なうかは、ステーキ部長が決めます。召された人は、記録のフィルムから結婚、死亡等の情報を抄出できるよう文字の読み方を学びます。

記録の抄出はすべて、ふたりの人が行ないます。そして結果をコンピューターにかけ、コンピューターが情報を比較します。食い違いがあれば、機械の作動が止まり、もうひとりの確認係のタイピストが直ちにどちらの抄出が正確かを判定します。こうすることにより、正確な記録を作成します。

本誌：一般の会員でも記録抄出の仕事ができますか。

ファッジ兄弟：それは訓練次第です。正確にすらすらと文字が読めるようになるには何週間かの訓練が必要です。

本誌：抄出の仕事に携わらない人にも、自分の4代の系図を提出した後、まだ何か系図に関する責任があるのでしょうか。

ファッジ兄弟：もちろんです。教会員のできることは沢山あります。例えば、ステーキ部長は会員に、墓石の文字を写したり法廷の古い記録を書き取ってもらったりして、最終的に系図上価値のある記録をすべて収集し、索引を作成するようにします。これを行なうためには、相互調整が必要です。そうすればその地域に先祖のいた人は、4代の系図を作成する時に、この記録を利用

することができます。

記録の索引を作ることは、会員にできるもうひとつの重要な仕事です。フィルムを1本ずつ見てもいなくても、索引を調べれば必要なフィルムが取り出せるからです。会員にできる第一の仕事は、記録から抄出された死者のために神殿の儀式を行なうことです。1977年6月に、ユタ州セントジョージの2つのステーキ部の協力を得て、抄出の作業を試験的に開始しました。現在40人弱の人が抄出係として召され、セントジョージ神殿で現在行なわれている死者の儀式に要する名前を全部提供しています。

神殿で儀式を施す死者の名前は、その神殿地区内のステーキ部が提供することが望ましいというキンボール大管長の願いは、将来の姿を暗示するものであり、程なく実現することでしょう。そして、この状態に至れば、さらに盛んな次の神殿活動に移行していく姿が容易に想像できることでしょう。神殿の数は増え、生者の間でも死者の間でも、伝道が盛んになることでしょう。教会全体として私たちは予言の成就する時代のただ中に生きているのです。

私たちは神殿活動のために、膨大な人名の目録を作成しようとしています。すでに多数のマイクロフィルムを所有しており、現在も毎日多くの記録をマイクロフィルムに撮っています。このマイクロフィルムから記録を抄出するのです。平均して、ひとりの人で1時間に20の氏名を抄出できます。系図宣教師がさらに多く召されると、神殿に送る氏名の目録を作成することができます。そうなるまでの神殿地区も神殿の仕事をもっと速く推し進める必要性を感じることでしょう。神権指導者は会員にもっと頻繁に神殿に行くよう奨励するようになるでしょう。神殿で行なわれるエンダウメントの数は増え、神殿が開かれている時間も長くなり、今より多くの人をもっと頻繁に神殿に行くようになることでしょう。

神殿が1日24時間開かれ、神殿がここかしこに建てられる日が来るのをキンボール大管長が予見されたことは、容易にうなずけます。記録の収集と抄出の作業がこの状態を実現に近づけます。新しい神殿を建てることと神殿に行くことがこれまで以上に強調されることでしょう。これを達成させる唯一の方法は、教会員個人の努力に依存するのではなく、会員の力、英知、才能を結集させてこれを利用することです。

本誌：抄出された氏名の処理を速めるために何か行なっていますか。

ファッジ兄弟：従来系図部が果たしてきた機能の多くを、合衆国外の神殿地区に設けられる神殿サービスセンターが果たすようになります。例えば、現在ブラジルで神殿サービスセンターが業務を始めているので、ブラジルの聖徒はもう「家族の記録」や「個人記入フォーム」をソルトレーク・シティーへ送って確認処理してもらい、またブラジルへ返送してもらうという手間を掛ける必要はありません。また、神殿の儀式を終えた記録をソルトレーク・シティーへ送る必要もありません。ブラジルで記録を処理し、必要な神殿の儀式を行ない、ブラジルに記録を保管することになります。神殿は終了した儀式の写しだけをソルトレーク・シティーへ送り、安全に保管するため地下の保管庫に納めるようにします。

マイクロフィルムを作成する作業についても同じことが言えます。私たちは間もなく世界各地で記録を撮影し、処理し、記録を作り、記録の抄出を行なうようになることでしょう。神殿地区でその作業を終えると、ネガフィルムだけがソルトレーク・シティーの系図部に送られます。

本誌：いつこの神殿サービスセンターの設立を開始しますか。

ファッジ兄弟：必要に応じて設立します。すでに、メキシコシティーとサンパウロと東京には設立されています。これはこの仕事

の責任を教会員に課す計画の一部です。教会員に権能と記録、抄出と確認処理の手段、それに神殿が託されることになります。

神殿の儀式を記録する作業は、間もなく神殿に小さなコンピューターを設置することによって大幅に時間が短縮されることでしょう。コンピューターによって死者の名前が提供され、記録が自動的に最新の状態に維持されるようになります。神殿推薦状には、あなたの名前とユニット（ワード部とステーキ部）番号を示すマグネットが付けられます。その推薦状をコンピューターに入れると、すぐにあなたが身代わりになる人の氏名が印刷されたものが出てきます。また、コンピューターにより神殿記録にあなたの名前とユニット番号、儀式の日付が記録され、同時にワード部神権指導者のために統計記録が作成されます。

本誌：まだ4代の家族の記録を完成していない人に役立つ新しい情報がありますか。

ファッジ兄弟：あります。日曜学校に新しい12週間の系図コースが設けられます。これは4代の系図探求を行なう方法を取り上げたものです。もうひとつ助けになるのは、コンピューター化された系図ファイルです。会員が1979年7月以降正確な系図表を提出して下されば、私たちはその系図情報に基づいてコンピューター・ファイルを作成します。

例えば、会員が日曜学校の系図クラスに出て、4代の家族の記録を提出する方法を学んだとします。この人が最初にするのは、教会のコンピューターに記憶された系図ファイルを調べることです。分かっている範囲で系図表を提出して下されば、系図部はコンピューターによってその人の系図がすでに教会のファイルに入っているかどうかを調べます。そして、その人に私たちの持つ情報を全部提供し、同時に情報提供者の名前と住所を教えます。

私たちはまたコンピューターを使った目

録を作成中です。この目録には、私たちの図書館にある蔵書のすべてと、私たちの図書館になく、マイクロフィルムに撮影する予定もない世界各地の系図記録の情報も挙げられています。したがって、その目録を調べると、必要な記録の所在が分かります。できれば、その目録をマイクロフィッシュあるいはその他によって、ステーキ部の図書館に安価に配布したいと考えています。

本誌：この仕事は今後も発展すると思います。あなたは家庭で子供さんを交えて何をなさるつもりですか。

ファッジ兄弟：私は子供たちや、私の姉とその子供たち、それに私の父と集まって、「系図表」と「家族の記録」に載る情報が正確かどうか確認するつもりです。そして1979年7月に、すぐそれを提出します。私はまた4代以上さかのぼって系図を全部提出します。

次に結婚した子供たちに、それぞれ家族の歴史と個人の歴史を書き続けるよう勧めます。私は自分の生涯の事柄をテープに吹き込み始めました。テープに吹き込むことは、孫も曾孫も実際に私の声を聞くことができるので特に価値があると思っています。

本誌：教会は日記をつけたり、個人や家族の歴史を書くことを非常に強調していますが、それはなぜか説明していただけませんか。そのこととこの仕事とどんな関係があるのでしょうか。

ファッジ兄弟：記録をつけるように主から命じられているということもありますが、そのほかそれによって子供や孫が自分たちの受け継いでいるものを自覚し、大いに恩恵にあずかるということがあります。個人の記録は私たちに先祖を身近に感じさせ、先祖のことをよく知ることで私たちの心をそれだけ先祖に向けさせてくれます。祖父の日常の活動が、もっと戒めを守るようにしようという私たちの意識を高めてくれることがよくあります。その結果家族のきずなは

強くなり、先祖のために福音の救いの儀式を行ないたいという望みも大きくなります。

本誌：1980年にユタ州ソルトレーク・シティで「私たちの受け継ぎを守る」というテーマで世界記録会議が開催されることが最近発表されましたが、この会議の主な目的がそれなのですか。

ファッジ兄弟：そうです。私たちは人々に個人の歴史と家族史を残すように勧めたいのです。教会が家族や個人、それに社会に受け継がれている遺産に関心を寄せていることを人々に知らせることによって、この会議が伝道の面で貢献することを願っています。

もうひとつの大きな目的は、コンピューターを使った系図ファイルを世界に開放することです。私たちは会員はもとより非会員にも、マスターファイルを作成するのに役立つ系図を提出するよう奨励しています。私たちはこの大会が開かれることを非常に喜んでいますが、そして大きな成果が得られることを期待しています。

本誌：これらの新しいプログラムについてあなたはどのように感じておられますか。

ファッジ兄弟：私たちは本当に恵まれた時代に生きていると思います。昔の予言者の中には今の時代に住みたいと思った人が大勢いたことでしょう。今は非常に多くの働きが必要な時代です。この働きは皆で分担すべきものです。人がひとりではできません。

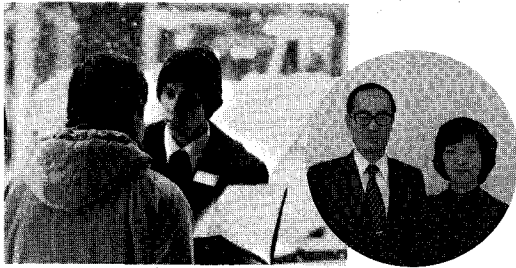
私は救い主がゲッセマネの園に入る前に捧げられた祈りのことを思い出します。救い主は、ご自分と御父がひとつであるように、弟子たちもひとつとなれるよう祈られました。(ヨハネ17：22参照) 私たちはアダムの家族をひとつにしようとして努力していません。それをするには、力を合わせなければなりません。そして、そうする時にももちろん天の御父が求めておられるみ業が達成されるのです。しかも御父の時間表に従って進められることになるのです。

みちのく

東北の宣教師

日本仙台伝道部
部長

坂井 圭



去る10月13日、十二使徒評議員会会員ボイド・K・パッカー長老より伝道部長に任命されました。そこで翌朝、早速書店に行き、東北を紹介する書物を何冊か拾い読みしてみました。その中に共通していたのは、自然の美しさと、その中で生きる忍耐強く純朴な人々の暮らしです。

あれからまだ数週間ですが、今私は東北六県で働く宣教師に会うため各地を訪問しています。車窓には美しい紅葉の山々が映え、自然は秩序の存在することを無言の内に証明しています。アルマ書第30章でアルマは、神の存在を否定する疑い深いコラホルに次のように言っています。「万物は神のあることを示している。大地もその表面にある万物も、大地の運動も、各々秩序正しくその軌道を運行する天体も、みなことごとく全能全権の創り主があることを証明している。」(アルマ30:44) 峡谷を走る車の右、左に、次から次へと姿を見せる山並みはこれでもかこれでもかとアルマの言葉を再現し、創造主の偉業をほめたたえています。

このような自然に恵まれた東北六県で、現在160名の宣教師たちが伝道しています。この地を訪れて最初に感動したのは、彼ら160人が語ってくれた、「なぜこの東北へやってきましたか」という問いに対する答えです。向かい合った宣教師のひとり、生まれつき右足の骨がひとつ足りなくて歩くことができず、今までに14回手術を受けたと語ってくれました。ズボンに隠れた足にそっと触れた私の手に、固い木の感触が伝わってきました。「子供の頃いじめられたり、転んだり、足が不自由なことを何度となく泣きました。そんな時、お祈りをする、その度に悲しみは消えていきました。10数回の手術と言えば大変な

ようですが、父がいつも手術前に祝福をしてくれたので、安心して手術室に入れましたし、毎日少しずつ良くなっていくので楽しみでした。また、そのことから神様が生きていらっしゃるということがよく分かりました。」このような身の上をごく自然に明るく話してくれる宣教師の態度に、私は強く胸を打たれました。健康体でも疲れる伝道の仕事を、不自由な身でやり通そうとする宣教師の底力はどこからくるのでしょうか。このことを考えても、宣教師が確かに神の使いであることが分かります。

ひとりの宣教師はこんな体験を語ってくれました。「私は12歳の時にバプテスマを受けました。けれども、間もなく教会の教えを外れ、教会に行かなくなりました。兄ふたり弟ふたりの兄弟たちも、私の影響で良くない道へ走りました。ところが、大学に入り、家を離れてひとり暮らしをしていたある夜半、自分が今までしてきた良くないことが、突然走馬灯のように思い出されてきたのです。自分の行動だけでなく、兄や弟たちの悪の源も自分であるという思いが、裁きの座にあるごとく、私を襲ってきたのです。私はあまりの恐ろしさに耐えられず、ベッドのそばにひざまずくと、一心に神に祈り始めました。そうするよりほかに方法がなかったのです。今までに自分から本気で祈ったことがなかったので、どのように祈ればよいのかわかりませんでしたが、とにかく主に祈りました。すると、『早く家に帰った方がよい』という気持ちを感じました。そこで、夜が明けるとすぐ母に電話し、翌日帰宅しました。その明るく日は日曜日でした。いつも10時か11時頃起きる私でしたが、その朝はどうしたのか、五時半に目が覚めて、もう眠れませんでした。そこで仕方なく起き出すと、急に教会へ行って見たくくなりました。

集会所に着くと、神権会が始まっていました。自己紹介をと言われ、『なぜだか分かりませんが、今朝教会に来たくなったので参りました』とあいさつしました。神権会が終わるとひとりの兄弟が笑顔で近づいてきて、握手を求めました。そして、『あなたがいらっしゃるのを、私たちは待っていましたよ』と言ったのです。どうして私を待っていたのだろう。来ると言っておいた訳でもないのに不思議に思っていると、『私たち長老定員会は、現在教会を休んでいる兄弟たちが、再び元気を取り戻し、早く教会に来よう毎週日曜日、みんなで断食をしてお祈りしています。今朝あなたをお迎えできて本当に喜んでいました』と言いました。この言葉はショックでした。そのことがあって、私は謙遜になり、以来新しい生き方へと方向を転じたのです。伝道に出る平均年齢から数年遅れましたが、私も主のことを証するために故郷を離れました。」この宣教師の大好きな讃美歌は(18番)です。「神は造り主、声あげてうたえ、アレルヤ、アレルヤ……」で始まるこの歌詞のひとつひとつが彼の心意気を実証しているようです。

宣教師として日本に来る以前に、日本で生活したことのある人々もいます。そのひとは、以前メソジスト教会に属していました。しかし、17歳の頃に幾らかの疑問を持ち、教会で質問しました。けれども、納得できる答えを得ることができませんでした。その後、大学に進み、哲学を学んでいる時、仏教への関心が高まって来ました。その頃丁度、名古屋で米人家庭教師を募集しているというニュースを聞き、来日して6カ月間滞在しました。帰米後、ソルトレーク・シティーを訪問した父の記帳カードをたどってふたりの宣教師が訪れ、彼らから福音を学ぶことになったのでした。すると福音を学ぶにつれ、今までの疑問がひとつずつ解消してきました。けれども、もうひとつ確信が得られません。その時、勧められた通りにモロナイ書10章の約束を実行したところ、この教えが真実であることが分かりました。そこで彼はバプテスマを受けました。そして今度は、自分の証を伝えるべく宣

教師に志願したのです。こうして間もなく受け取った召しの手紙によると、伝道先は日本でした。

宣教師は、2年間の伝道期間中に、いろいろな出来事に出会います。宣教師として家を出てから親を亡くした長老たちが4人もいました。彼らがアパートで食べるサンドイッチのパンは、両面とも堅いパンの耳で、ふたつ目になるとあごがだるくなってきます。ドル安で手持ちのお金の価値が下がり、柔らかいパンを買えない彼らを見ると、何だか申し訳ない気持ちになります。

そんな感傷じみた私とは違って、彼らは皆明るい人々です。2年間の伝道を終えて帰路につく彼らは、異口同音に、「この地で伝道できたことを『感謝』します」と言います。

食べたいものも食べられず、厳しい寒さ、暑さと戦いながら、雨の日も風の日も、自分のお金を使って2年間伝道した彼らに「ありがとうございます」と言わなければならないのは私たち日本人であるにもかかわらず、彼らは申し合わせたように「感謝します」と言って立ち去ります。なぜ本心からそれが言えるのでしょうか。この地へ来て、160人の宣教師と個人的に話すうちに、この訳がよく分かりました。それは非常に簡単です。伝道することによって、神と人への愛を深めることができたからです。伝道の経験によって、神に対する信仰と証、それに人々への愛を学ぶことができたことを感謝しているのです。

この地上で最も価値あるものは何か、また真理によって人はどう変わるかを体得できたことを感謝しているのです。伝道でそんな体験ができたことを彼らは皆喜んでいるのです。うれしいから、明るい顔、輝やいた目をしているのです。

私たち家族は、このような素晴らしい宣教師のお世話をしながら、これから数年間この東北の地で過ごせることを感謝しています。最後に、神様が生きていらっしゃること、ジョセフ・スミスの経験が真実であることを証します。

ジェームズ・E・ファウスト長老 使徒に召される



去る9月30日、過去2年間、七十人第一定員会会長会の一員を務めてきたジェームズ・E・ファウスト長老が、新たに十二使徒評議員会の会員として支持を受けた。

スペンサー・W・キンボール大管長は、総大会の土曜日の午前の部において、ファウスト長老が新しい使徒に召されたことを発表した。それと同時に、ソルトレーク・タバナクルに集まった全会衆に支持の挙手が求められ、全員一致で支持された。

ファウスト長老(58歳)は、ソルトレーク・シティーで弁護士業を営み、1972年に教会幹部に召されて以来、教会の指導者として働いてきた。そしてこの度、デルバート・L・ステイプラー長老の死去(8月19日)に伴って生じた、十二使徒評議員会の空席を満たすこ

とになったものである。

使徒に召されたファウスト長老は、土曜日の午後の大会で、会衆に次のように語った。

「キンボール大管長、ならびに兄弟姉妹の皆さん、私は今、この召しを受けるのに自分はふさわしくないのではないかという気持ちでいます。これまでにこの召しを受けただけよりもその気持ちが強いかと存じます。

しかし私は、聖なる使徒職にある者の第一の条件が、神聖な贖い主、キリストなるイエスの個人的な証人となることであることを知っています。この点については、私にも資格があると思います。私は言葉に言い表わせない神のみたまの平安と力によって、真理を学んできたからです。」

また、長老は次のように語った。「私は、地

位のない人やしいたげられている人、貧しい人、苦しんでいる人、謙遜な人、これらの人人にいつも深い愛を示すキンボール大管長やその他の方々の模範に倣い、主の弟子として働きたいと思います。もしもこれを忘れたならば、決して主の弟子とはなれないことを私は承知しています。」

「私は神と、神の予言者キンボール大管長に、私の生涯と活力と、少しではありますがあらん限りの能力を、無条件にすべてお捧げします。イエスがキリストであり、神の御子であることを知っているからであります。

救い主もご存じのように、私は主の生きておられることを知っています。ですから、喜んでこの召しと鍵と責任を引き受け、最善を尽くすと約束申し上げます。」

ファウスト長老は現在、教会教科課程部の管理部長、教会の月刊誌『エンサイン』『ニューエラ』『フレンド』の編集長、デゼレトニューズ出版社取締役副社長を兼務している。

また長老は、南米のゾーン・アドバイザーを務めており、国際伝道部の部長でもあった。

ファウスト長老は、ジョージ・A・ファウストを父、エイミー・フィンリンソンを母として、1920年7月31日にユタ州デルタに生まれた。その後、1939年から1942年までブラジルで伝道に従事し、帰国後合衆国空軍に入隊した。空軍では少尉となり、第二次世界大戦中は、情報部の将校を務めた。

ファウスト長老は、1943年4月21日に、ソルトレーク神殿でルース・ライト姉妹と結婚し、現在3男2女の父親である。

また長老は、1948年、ユタ大学で法律の学位を取得して間もなく、ユタ州議会の議員に選出された。さらに1962年には、ユタ州弁護士協会の会長に選出され、市民権と人種不安に関する特別委員会で働いた。また、合衆国遺言法律顧問院と国際弁護士協会にも所属し、遺言ならびに遺産、信託財産法の改正に貢献した。

ファウスト長老はまた、長年教会で指導者として数々の責任を果たしてきた。17歳でワード部日曜学校管理会長に召され、28歳の時にワード部の監督となった。

1956年には、35歳でソルトレークのコットンウッド・ステーキ部の部長に召され、1968年にダラス地区担当の地区代表に召されるまで12年間この職にあった。

そしてファウスト長老は、1972年の10月大会で、十二使徒補助として支持を受け、その後、メルケゼアク神権M I A実務部長、デゼレトニューズ出版社取締役、教会福祉活動のディレクターを務めた。

長老が南米担当の地域担当教会幹部となったのは1975年5月で、それとともに、ファウスト長老一家はブラジルのサンパウロに転居し、ここで2年間、当地の教会指導者の指導に当たった。

さらに1976年10月に、ファウスト長老は、七十人第一定員会の7名の会長のひとりに召された。そして、合衆国へ帰国して間もなく、南米担当のゾーン・アドバイザー、および国際伝道部部長の召しを与えられたのであった。

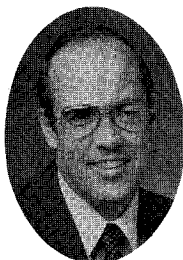
W・グラント・バンガーター長老 七十人第一定員会会長に召される

ジェームズ・E・ファウスト長老が使徒に召されたために生じた七十人第一定員会会長の空席は、七十人第一定員会会員のW・グラント・バンガーター長老が埋めることが、キンボール大管長より発表された。

また、ユタ州バウンテフル在住のF・バートン・ハワード、カナダ・アルバータ・カルガリー在住のテディー・E・ブルーアートン、ソルトレーク・シティー在住のジャック・H・ゴースリンド・ジュニアの各長老が、新たに七十人第一定員会会員として召された。



W・グラント・バンガーター長老



F・バートン・
ハワード長老



テディー・E・
ブルーアートン長老



ジャック・H・ゴース
リンド・ジュニア長老



日本仙台伝道部部长
リチャード・D・S・クワック

リチャード・D・S・クワック前仙台伝道部長 LDS病院に入院される

仙台伝道部のクワック前伝道部長は9月に体の具合を悪くし、病院で治療を受けてこられました。しかし経過が思わしくないため、先頃、ソルトレーク・シティーのLDS病院に入院されました。これに伴い、去る10月、伝道部長の責任を解かれました。これまでのクワック伝道部長の献身的な働きに感謝するとともに、一日も早く健康が回復されるよう心よりお祈りしたいと思います。



キリストとクリスマス

第9代大管長

デビッド・O・マッケイ

クリスマス・シーズンになると、私たちは他のいかなる時期にも増して、人々のことを考え、自分の言葉や行ないによって人々を幸福な気持ちにさせたいと望むようになる。ここに、真の幸福のひけつがある。「わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであらう。」(マルコ8:35) この言葉は哲学的に聞こえるかも知れないが、真のクリスマス精神があれば、この言葉の意味はよく理解できる。

神を愛し、互いに愛し合うこと、これこそクリスマスのテーマである。そして、「大きな喜び」(ルカ2:10)を最初に告知させた天のみ使いによってもたらされた神からのメッセージである。

「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなる人々に平和があるように。」(ルカ2:14)言葉は簡単であるが、その意味はなんと深く広いことだろう。クリスマスは、イエスが、(1)神に栄光を帰し、(2)地上に平和を約束し、(3)すべての人に神の愛を知らせるという使命をもって、降誕されたことを祝う時である。

この世に生を受けるすべての人が、イエス

の生涯が告げるこの3つの栄えある目的を受け入れるならば、人生はどれ程快く、また幸福なものとなることだろう。この目的を理解する人々はすべて清きこと、正しいこと、誉れあること、徳高きこと、真実なること、さらに人を完成へ導くすべてのものを追い求めるようになるであらう。これらの徳は、神に栄光を帰したいと願う人々が求めているものだからである。そのような人々は、不純なこと、不道德なこと、卑しいことを遠ざける。人が同胞を愛する望みを起こし、無私と犠牲の精神を思わせる優しい言葉と小さな行ないによってその望みを表わす時に、私たちは皆、人類の平和と幸福に大いに貢献することができるのである。

クリスマスは、救い主がお生まれになった時に、天のみ使いたちによって告知されたあのメッセージを人々の中に成就させたいという望みを新たにし、最善を尽くすことを決心する時である。善きこと、真実なること、麗しきことを求め、神に栄光を帰そうではないか。また、神が私たちに示して下さったその同じ愛をもって互いに愛し合い、この地上に平和をもたらすよう励もうではないか。

ある日、父なる神のみ言葉を携えてマリヤのもとを訪れた天使ガブリエルは、彼女がすべての女性の中で最も祝福された者となることを告げました。マリヤは、神の御子の母として選ばれたのです。これを聞いたマリヤの心はさぞかし騒いだことでしょう。しかし、献身的に主に仕えるマリヤには備えができていました。そこでマリヤはこう答えました。

「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。」（ルカ1：38）

神を信じ、喜んで奉仕しようとするマリヤの精神は、末日聖徒の若い女性の良い模範です。

末日聖徒イエスキリスト教会

浦和ワード部

付属図書館

